

研究紀要（2年次報告）NO.96

研究紀要
No.
96

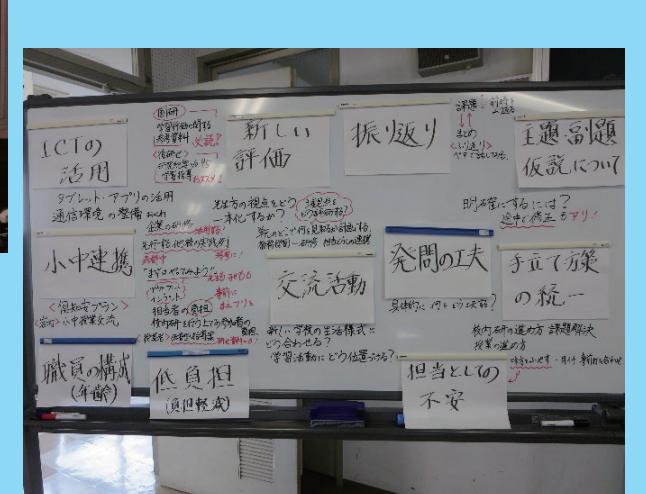
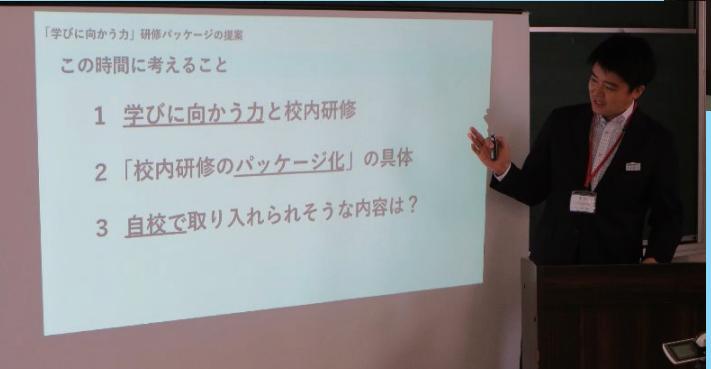
学習指導に関する調査研究委員会

授業力の向上と校内研究の活性化

～学びに向かう力の育成を通して～

授業力の向上と校内研究の活性化

令和4年3月



令和4年3月

後志教育研修センター

後志教育研修センター

『難しいことは易しく、
易しいことは重たく、
そして広く』

序

社会全体が大きく、そして急激に変化する時代に突入しております。次代を担う子供たちには、多様な人々と協働することで予測困難な社会的変化を乗り越え、自らの人生を切り拓き、やがては持続可能な社会の創り手の一員として活躍することが求められています。

標題の言葉は、今年の1月に、2年ぶりに開催された調査研究事業報告会の開会式の中で述べた言葉です。管内から学校教職員や社会教育主事など57名の参加を得て、学習指導と社会教育に関する調査研究の中間発表を行いました。

この言葉の意味は、誰もが「なるほど」と納得でき、多くの人に「自分でもやれそうだ」「自分もやってみよう」という気持ちにさせることが大切であり、その成果を他の人が使うことで、初めて価値が生まれるということです。

当センターでは北海道教育研究所連盟第17次共同研究『学びに向かう力の育成に向けた指導と評価の在り方』を主題とする研究に参画し、学習指導研究委員会は『授業力の向上と校内研究の活性化～学びに向かう力の育成を通して～』を研究主題として、4年次研究の2年目の研究を推進しております。

研究委員会では学習指導要領で育む「学びに向かう力」の育成についての実践研究を行い、所員が担当する3つの研修講座、「校内研修」、「学習指導（授業づくり）」、「学習指導（授業改善）」を通して、授業力の向上と校内研究の活性化の調査研究を深めてまいりました。

報告会に参加された先生方の声には、「管内にしっかりと成果を広め、定着させるためにも大切な報告会だと考えます」「たくさんの具体例、活動はどれも貴重なものなので、工夫されながら続けていかれること期待しております。発表はとても明瞭でわかりやすかったです」「コロナ禍ではありますが、所員の方々の熱意が伝わるのはやはり今回のような形式かと思いました」など、嬉しい感想が出されていました。

当センターの調査研究の内容を小樽・後志の学校教職員が「なるほど」と納得し、各先生方が「この位なら自分でもできる、やってみよう」という気持ちになってくれることを願います。その後、実際に各学校で使ってみて、その成果はどうであったのか検証され、最終的には、学校の子供たちに還元されることが一番大切なことあります。そこで初めて当センターの調査研究の価値が生まれることになります。

結びになりますが、所員を支えて頂いた校長先生、そしてご指導いただきました北海道教育庁後志教育局、教育関係機関の皆様に厚く感謝申し上げ、発刊の言葉と致します。

後志教育研修センター
所長 長谷川 誠

令和4年3月

目 次

◇序

後志教育研修センター 所長 長谷川 誠

学習指導に関する調査研究委員会

【第1章】 研究の概要

【担当：小西・森・清水】

1 研究主題および副主題	研究の概要 - 1
2 主題設定の理由	研究の概要 - 1 ~ 3
3 研究仮説	研究の概要 - 3 ~ 4
4 研究の視点	研究の概要 - 4
5 研究計画	研究の概要 - 5 ~ 7
6 研究構造図	研究の概要 - 8

【第2章】 研究の内容（所員担当研修講座）

I 研修講座「学習指導（授業づくり）」から 【担当：亀井・鶴見・武田】

1 教師も子どもも明日の授業が楽しみになる！単位時間の授業づくりについて	学習指導（授業づくり） - 1 ~ 6
2 アクティブラーニングの視点から学習規律を考える	学習指導（授業づくり） - 7 ~ 9
3 指導と評価～入口編～	学習指導（授業づくり） - 10 ~ 15
4 理科の観察・実験準備について	学習指導（授業づくり） - 16 ~ 17

II 研修講座「学習指導（授業改善）」から 【担当：馬場・富樫・小西】

1 主体的・対話的で深い学びにむけた授業改善の視点	学習指導（授業改善） - 1 ~ 6
2 学習評価について	学習指導（授業改善） - 4 ~ 12
3 学習評価の進め方の例	学習指導（授業改善） - 13 ~ 18

III 研修講座「校内研修」から 【担当：笠原・田口・高田】

1 研究主題解決のための研究仮説や研究計画の立て方	校内研修 - 1 ~ 7
2 「学びに向かう」研修パッケージの提案	校内研修 - 8 ~ 10
3 校内研修にかかる課題・悩みについての交流から	校内研修 - 11 ~ 14

【第3章】 研究の成果と課題

◇あとがき

【第一章】

研究の概要

<第1章>研究の概要

1. 研究主題および副主題

授業力の向上と校内研究の活性化 ～学びに向かう力の育成を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 子供たちの生きる社会



少子高齢化に加え、若年人口の減少、一方では、情報通信技術の発達、グローバル化の進展など、日々、急速な変化を遂げている現代社会。今の子供たちが成人する頃には、現在ある職業がAIに置きかわるなど、社会構造が大きく様変わりすることが予測されている。

内閣府の第5期科学技術基本計画において、我が国が目指すべき未来社会の姿として Society 5.0 が提唱された。たとえば、

IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで今の社会の課題や困難を克服する。人工智能 (AI) により、必要な情報が必要な時に提供される。ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服される。今の子供たちが社会で活躍する頃に目指すべき未来社会の様相が、ここには描かれている。こうしたよりよい未来社会を実現するためには、現状にとどまることなく、技術革新や社会の変革を生み出していくことが求められる。今を生きる子供たちが、多様な人々と協働しながら、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な未来社会の創り手となるために必要な能力、すなわち、「生きる力」を確実に育てることが学校教育で急務となっている。

(2) 求められる「生きる力」

今、私たちの目の前にいる児童生徒が成人したとき、一人一人が豊かで幸福な人生を歩んでいくため、あるいは、未来社会を切り拓いていくようになるため、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」が求められる。平成28年12月の中央教育審議会答申においては、「生きる力」に関して、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の

創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であることが指摘された。このような新しい時代に必要とされる資質・能力は、①【知識・技能】「何を理解しているか、何ができるか」、②【思考力・判断力・表現力】「理解していること・できることをどう使うか」、③【学びに向かう力・人間性】「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の3つの柱に整理された。新しい学習指導要領においても、3つの柱で整理される形で、その改訂内容が示された。令和2年度には小学校、令和3年度には中学校で全面実施され、各学校の教育課程のなかでは、その趣旨の実現が求められている。

(3) 「学びに向かう力」とは

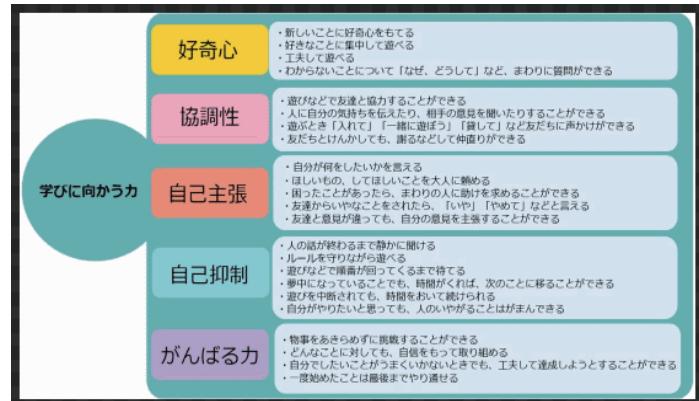
この3つの柱のうち、特に、③

【学びに向かう力、人間性等】に整理される情意や態度に関わる資質・能力は、知識・技能や思考力・判断力・表現力をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であるとされている。主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等は、一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓ひらいていくために重要なものである。

これらの資質・能力には、どのようなものが含まれるのか。たとえば、ベネッセ教育総合研究所では、学びのベースとなる非認知機能について、【学びに向かう力】として「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」の5つの項目に整理している。また、これらの資質・能力は、自分の思考や行動を客観的に把握し認識すること、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものであるとされる。こうした力は、将来、児童生徒が社会で活躍する中で、あるいは、家庭生活を営む中で様々な困難に直面する可能性を低くしたり直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。こうした力を育むことのできる授業実践が求められている。

(4) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

中央教育審議会答申には、学びに向かう力などの資質・能力を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。さらに、3つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。これから授業づくりにおいては、教科等の特質を踏まえ、それぞれの授業で身に付けるべき学習内容や目の前の児童生徒の実態に応じて、これらの視点を手掛かりに、質の高い授業を実現することが求められる。後志管内、どの学校でも、どの教室においても、すべての児童生徒がこうした質の高い授業の中で学校生活を送ることができれば学習内容がしっかりと定着し、求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようになることが期待できる。



ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育国際調査」より

（参考）
幼児期の家庭教育国際調査
ベネッセ教育総合研究所
2019年1月

【主体的な学び】 …学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる。

【対話的な学び】 …子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ、自己の考え方を広げ深める。

【深い学び】 ……各教科等で習得した概念や考え方を活用したり、「見方・考え方」をはたらかせ問い合わせを見出したり、解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想・創造したりする。

(5)指導と評価の一体化

主体的・対話的で深い学びにむけた授業改善のために、学習評価の工夫改善も求められている。学習評価の在り方は、児童生徒の学習の成果を的確に捉え、教師が授業の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも重要である。学習の過程や成果を適切に評価することは、学習指導の改善や学習意欲の向上を図るために不可欠なものである。実際の評価においては、学習の過程の適切な場面で評価を行うために評価の場面や方法を工夫する必要がある。調査研究委員会においては、学習評価についての基本的な考え方や方向性、基本構造について情報提供も含めた資料を作成し、管内各校に提案していく。

(6)研究の方向性について

将来、成人した児童生徒が未来社会を力強く生き抜いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた【学びに向かう力】、他と関わり合い学び合う中で、新たな価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が必要とされる。そのような力を育成するためには、質の高い授業の実践が不可欠である。これらを踏まえ、後志教育研修センター学習指導に関する調査研究委員会では、「授業力の向上と校内研修の活性化～学びに向かう力の育成～」という研究主題のもと、4年次計画2年目の研究推進に取り組んでいく。特に、見通しを持てる単元構成や課題設定の在り方、学習評価、授業改善の指針や、効果的な対話法について研究・推進を行うとともに、後志管内各校に組織的・計画的な校内研修の進め方の指針を提案していく。

3. 研究仮説

《仮説Ⅰ》児童生徒の学びに向かう力を育成する学習活動の実現を目指す授業改善の指針を示すことで、後志管内各校の校内研究推進のニーズに応えることができる。

【学びに向かう力】は主体的・対話的で深い学びを通して育成されるであろう。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を促進するためには、各校あるいは、個々の教員が参考にできるよう、具体的な授業改善の指針を示すことが有効であると考える。目指す学びを具現化した児童生徒の学びの姿として示すことで、より分かりやすいものになる。具体的で明瞭な指針が示され、校内研究で活用されれば、個々の教員の授業改善も進み、より多くの教室でより質の高い授業を実現できると考える。

《仮説2》組織的な・計画的な校内研究体制の確立、管内連携を目指した指導案バンクの作成を推進することで、協働性と個々の資質・能力の向上を図ることができる。

教員の資質・能力に関する中央教育審議会答申(平成27年12月)では、「教員は学校で育つもの」とされ、同僚の教員とともに学び合う校内研修の充実や、自律的・主体的に行う研修の重要性とそれらに対する支援の必要性が指摘されている。組織的・計画的な校内研究体制を確立することで、各校での校内研修が活性化すると考えられる。また、いつでもどこでも誰でもが利用できる指導案バンクの実現によって、自主的な研修の充実の促進を図りたい。個々の教員の必要性に応じて活用できるコンテンツは、「教育の専門家として、実践的指導力や専門性の向上に、主体的に取り組む教員」(北海道における「求める教員像」)に必要とされるものであろう。

4. 研究の視点

《視点1》学びに向かう力を育成するための授業改善

- 主体的・対話的で深い学びを目指した授業【研修講座「学習指導(授業改善)」】
- 若手教員のための、1時間の授業づくり【研修講座「学習指導(授業づくり)」】
- センター所員の所属校での検証授業の実施

《視点2》実践的指導力の向上を図るための教職員研修の工夫・改善

- 組織的な校内研究体制の確立とワークショップ型研修の推進【研修講座「校内研修」】
- 管内連携を目指した指導案バンクの作成



上記の視点の具現化のために、本委員会では、左記の3本の柱を立てて、研究を推進していくこととした。いずれも後志管内各校に、本研究の情報発信が可能な方策であると考えたためである。「検証授業」については、センター所員が所属する学校で実施する。「研修講座」については、センター所員が講師となり、本研究の内容を基盤とした3つの講座を開講する。「しりべし指導案バンク」については、センター所員の作成した指導案を素材として、「しりべし指導案バンク」を立ち上げるべくWEBシステムの構築を目指す。

【参考文献】

- 内閣府 HP 「科学技術政策」 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/, 2020年11月閲覧
- ベネッセ教育総合研究所 HP 「まなびのかたち【学びに向かう挑戦】」「幼児期の家庭教育国際調査」 https://berd.benesse.jp/special/manabi/manabi_22.php, 2020年11月閲覧
- 文部科学省 小学校学習指導要領解説総則編, 平成29年7月
- 吉富芳正編著『「社会に開かれた教育課程」と新しい学校づくり』ぎょうせい, 2017年
- 北海道教育委員会「北海道における教員育成指標」, 2019年3月

5. 研究計画

(1) 年次計画と実際

【第2年次】令和3年度（2021年度）「理論研究と実践」

- 「研究主題」「主題設定の理由」「研究仮説」「研究の視点」の確立
- 理論研修と資料収集により、具現化した授業構築の提案
- 検証授業
- 研修講座「学習指導（授業づくり・授業改善）」「校内研修」の資料作成・講座の運営
- 校内研修のパッケージ化及びしりべし指導案バンク作成に向けた構想作業
- 調査研究事業報告会に向けた準備、発表、研究紀要の作成

① 「見通しを持てる単元構成・課題設定」「対話的な学び」の検証授業の実践

- ・今年度は、新型コロナウィルス感染症対策の関係で検証授業は行わなかった。

② 所員による研修講座の実施

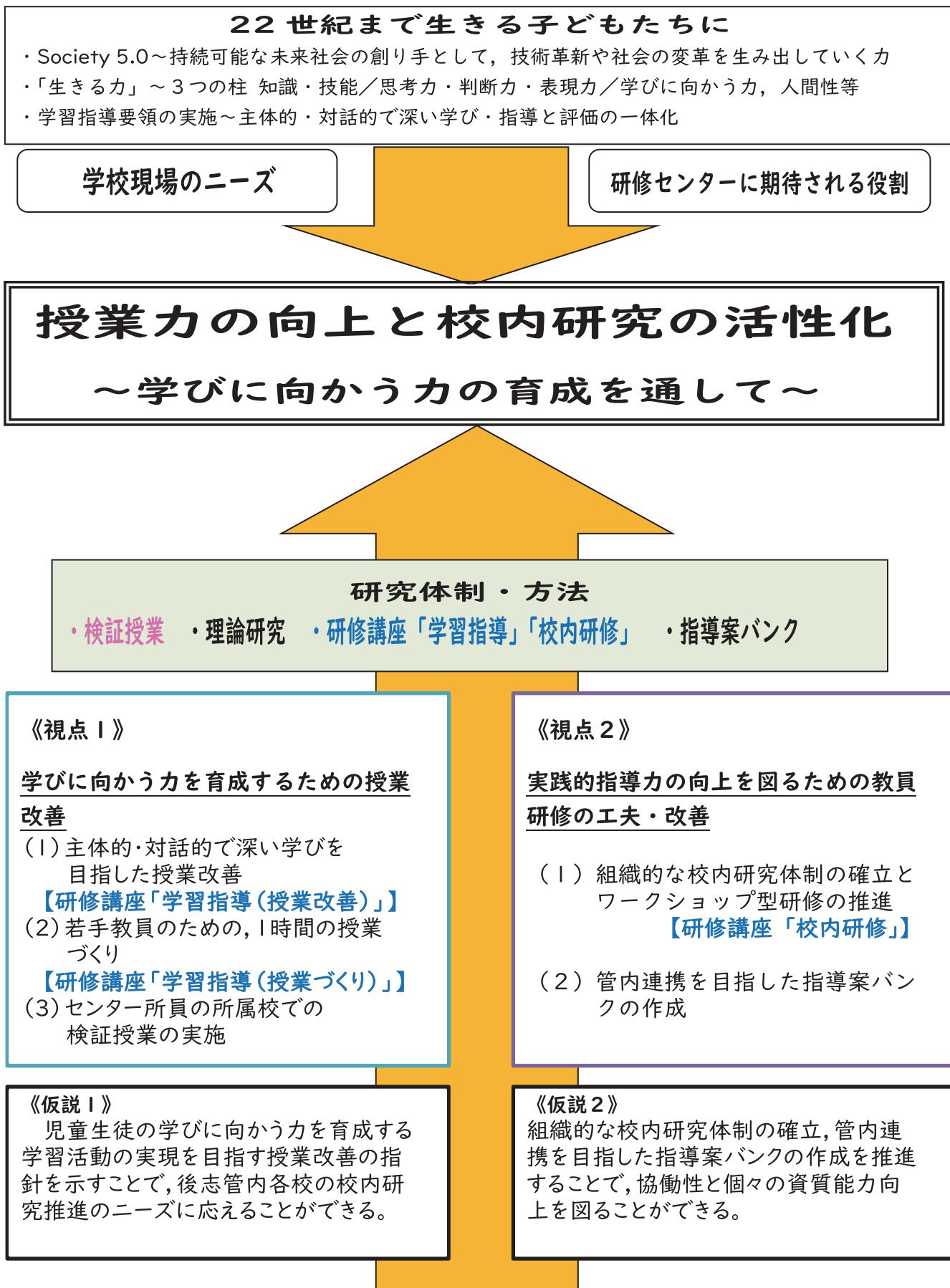
6月 2日 (水)	研修講座「校内研修」 ～全員参加の校内研修を目指して～ 対象：分掌チーフ・ミドルリーダー層（5年程度～），研究担当者 ○研究主題解決のための研究仮説研究計画の立て方、まとめ方など
6月 23日 (水)	研修講座「学習指導（授業づくり）」 ～明日の授業が楽しみになる！単位時間の授業づくり～ 対象：初任段階層（1～5年程度の経験年数） ○単位時間の授業づくり
10月 15日 (金)	研修講座「学習指導（授業改善）」 ～児童・生徒の学びに向かう力の育成を目指して～ 対象：分掌チーフ・ミドルリーダー層（5年程度～） ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について ○学習評価の改善について

今年度の調査研究委員（所員）の経過報告

回	日 時	名 称	内 容	備 考
1	4月30日（金） 所員会議後	第1回 調査研究委員会	①推進委員長、副委員長の選出 ②研究主題の確認 ③年間計画の作成 ④研修講座講師決定→講座内容の検討→事前研日程	研修センター 第一研修室
2	5月21日（金）	第2回 調査研究委員会 (校内研修事前研)	①研修講座「校内研修」事前研修 講座内容の確認・検討 ②レジュメの印刷、丁合等。	研修センター 研究室 ◎笠原・田口・高田
3	5月25日（火）	第3回 調査研究委員会 (授業づくり事前研)	①研修講座「学習指導（授業づくり）」事前研修 講座内容の確認・検討 ②レジュメの印刷、丁合等。	研修センター 研究室 ◎亀井・鶴見・武田
4	★6月 2日（水）	研修講座 「校内研修」	●運営、講師、参加 ※参加の都合のつく所員は参加。	講師 ◎笠原・田口・高田 (清水) オンライン
		第4回 調査研究委員会	①研修講座「校内研修」の事後研修	研修センター
5	★6月23日（水）	研修講座 「学習指導 (授業づくり)」	●運営、講師、参加 ※参加の都合のつく所員は参加。	講師 ◎亀井・鶴見・武田
		第5回 調査研究委員会	①研修講座「学習指導（授業づくり）」の事後研修	研修センター 第一研修室
⑥	7月 2日（金）	ミニ道研 ブロック遠隔研修	①授業づくりの基礎（指導方法、学習評価等） ②生徒指導の機能を生かした学級経営	後志教育局 亀井・笠原・馬場
7	7月28日（水）	第6回 調査研究委員会 (授業改善事前研)	①研修講座「学習指導（授業改善）」事前研修 講座内容の確認・検討 ②レジュメの印刷、丁合等。	研修センター 研究室 ◎馬場・小西・富樫
⑧	7月30日（金）	道研連夏季研修会 【オンライン】	①学習評価について ②ICTについて	道立教育研究所 高田・森・富樫 田口・武田
⑨	8月27日（金）	第76回北海道教育研究所連盟研究発表大会(後志大会)	●運営手伝い ※所員は基本的に全員参加体制をとる。	オンライン

回	日 時	名 称	内 容	備 考
10	★10月15日（金）	研修講座 「学習指導 (授業改善)」	●運営、講師、参加 ※参加の都合のつく所員は参加。	講師 ◎馬場・小西・富樫
		第7回 調査研究委員会	①研修講座「学習指導(授業改善)」の事後研修	
11	11月15日（月） 所員会議後	第8回 調査研究委員会	①今年度の研修講座についての交流 ②調査研究事業報告会に向けて	
12	11月25日（木）	道研連冬季研修会 【オンライン】	①学習評価について ②ICTについて	道立教育研究所 高田・鶴見・富樫 田口・武田・小西
13	12月28日（火）	第9回 調査研究委員会 後志教育講演会	①調査研究事業報告会に向けた、報告内容検討 役割分担 ②研究紀要骨子、役割分担の確認 ●講演会準備等	
14	1月12日（水）	第10回 調査研究委員会 調査研究事業報告会	①調査研究事業報告会発表準備 ②研究紀要について ●プレゼン発表 ②運営、参加	進行：清水 発表：亀井・鶴見
15	1月13日（木）	教育展望セミナー 【オンライン】	変革の時代の学校教育を展望する～北海道の未来を 拓く新たな学びの創造～	亀井・鶴見・笠原 高田・馬場・富樫 田口・武田・小西 森
16	2月15日（火） 所員会議後	第11回 調査研究委員会	①研究紀要原稿持ち寄り、検討	※第3回所員会議 終了後 【書面会議に変更】
17	クラウド	第12回 調査研究委員会	●研究紀要原稿の最終チェック	

6. 研究構造図



【第2章】

研究の内容

研修講座「学習指導（授業づくり）」

講義1 『教師も子どもも明日の授業が楽しみになる1単位時間の授業づくりについて』

亀井 孝志（島牧村立島牧中学校教諭）

本講義のねらいとして、

- 1 教師も子どもも明日の授業が楽しみになる1単位時間の授業とは、どのような授業であるのか、イメージを持つ。
 - 2 教師も子どもも明日の授業が楽しみになる1単位時間の授業づくりについて考え、必要な知識や理論を身につけ、実践の視点を持ち意欲を高める。
- と定め、一部演習を取り入れながら講義を行った。

1 明日の授業が楽しみになる条件とは

本研修講座は、経験年数1～5年である受講者を想定したものであることから、子どもの主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることに目的意識を持つことのできるよう、研修講座の副題にある「明日の授業が楽しみになる」とこと、「学習過程や学習活動の改善」の関連付けを図った。要約すると、次のような内容である。

教師にとって、次の授業が楽しみになるのは、子どもの「できた！」という反応が期待できる授業の準備ができたときである。実際に授業で、子どもが「できた！」という反応を示すには、子どもが主体的・対話的で深い学びの姿を実現し、その結果としてねらいとする資質・能力が身についたと自ら実感できたときである【図1】。

このような子どもの学びの姿を実現することを目的として、教師には、学習過程を組み立て、学習活動を位置づけることが求められる【図2】。

1 明日の授業が楽しみになる条件は？

子どもと教師の両方の立場から考えてみましょう。きっと…

子ども

今日の授業で、「これができた！（できるようになった！）」実感



- ・自分ってすごい！（自己肯定感）
- ・親や先生にほめてもらえる！
- ・これから的生活のこんな場面で活かしていこう！
- ・もっと深く学びたいな
- ・新たな疑問が沸いた！

明日の授業でも、「何かができるようになる！（なりたい！）」希望

教師

子どもが「できた！」と実感できる授業づくりができたとき



明日の授業はこれでばっちり！早く子どもの反応が見たいなあ。

教師に課された任務は、子どもに資質・能力を身につけさせること。
子どもの「できた！」の反応があると、教師は任務達成を実感できますよね。

3

図1 明日の授業楽しみになる条件

資質・能力を身につけさせるために…
私たち教師は、日々の授業づくりで、こんなことを願っているはず。

- 子どもが自らの意思で学ぶことができるようになる。
= **主体的な学び**
- 子どもが考えを広げられるようになる。
= **対話的な学び**
- 子どもが考えを深められるようになる。
= **深い学び**



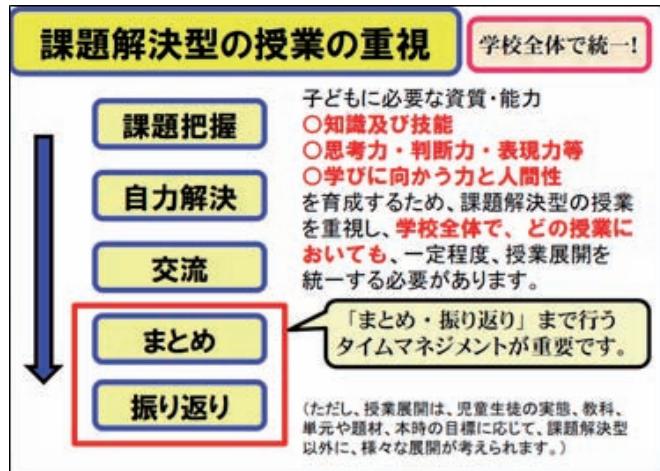
具現化！

学習過程を組み立て、
学習活動を用意する（位置づける）。

図2 教師に求められること

2 授業づくりの基本形

まず、授業作りの基本形として、「後志管内小中学校のすべての子どもに資質・能力を育成するために～学校全体の取組事例～（令和元年10月 後志教育局）」の『課題解決型学習』を取り上げ、この「課題設定」→「自力解決」→「交流」→「まとめ」→「振り返り」の流れをもとにその後の講義を展開することとした【図3】。



【図3】後志管内小中学校のすべての子どもに資質・能力を育成するために～学校全体の取組事例～（令和元年10月 後志教育局）

3 課題設定とまとめ

ここでは、簡単な演習形式を取り入れて、子どもが自ら解決すべき事柄を明確に把握できる課題設定について理解を深めた【図4】。

この3つの課題については、それまとめを考えることで、次のように捉えることができる。【図5】。

3 課題を設定する	
【算数科 小学校第6学年「ならび方や組み合わせ方を調べよう」の授業】	
<本時のねらい> 4つの遊具を全てまわる順番は全部で何通りあるかを、落ちや重なりがない方法を考える活動を通して、順序よく考えることができるようにする。	
A	【課題】「4つの遊具のまわり方を調べよう。」
B	【課題】「ブランコ、すべり台、ジャングルジム、てつぼうの4つの遊具をすべてしたいと思います。まわる順番を考えると、全部で何通りのまわり方があるでしょう。」
C	【課題】「落ちや重なりがないように調べるには、どのような方法があるだろうか。」
A～Cのうち、どの課題がもっともよいでしょうか。理由とともに考えてみましょう。	

【図4】3つの課題設定例

<ポイントとして>

○「How課題」にできるかどうか検討してみる。

どのような（How）という問い合わせ方で課題設定すると、まとめが「このような方法がある」や、「このようにすればよい」となり、本時で身につけさせたいことが整理された文章になる。ただし、学習内容によっては、なぜ（Question課題）のほうがふさわしい場合もある。

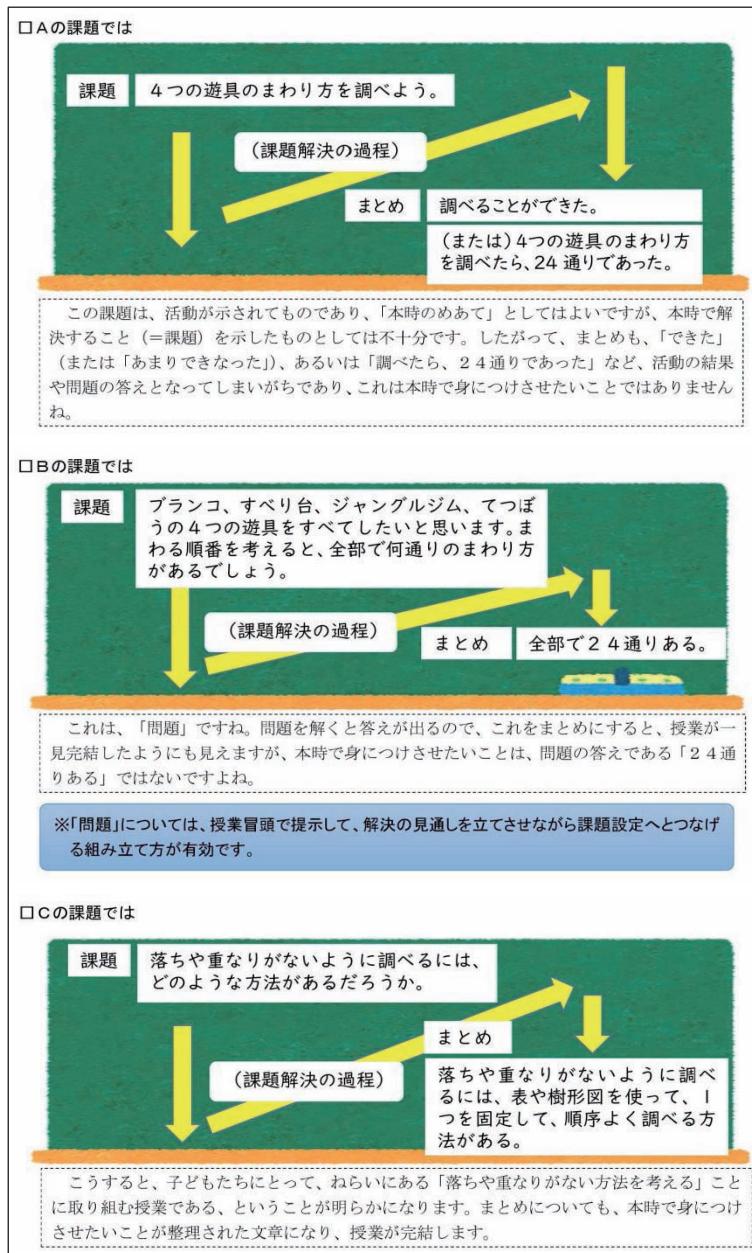
○「How課題」にすると、課題とまとめが正対する。

「How課題」に向かって、子どもは、「どのように」の部分を解決することを目指して学習を進めることになる。この例では、「表や樹形図を使って、1つを固定して、順序よく調べる」が解決した内容であり、課題とまとめが正対している。また、この解決した内容こそが、本時で身につけさせたいことでもある。

○課題よりも先に「まとめ」をつくることで、課題が設定しやすくなることもある。

本時で身につけさせたいこと（本時のゴール）を端的に文章化してまとめをつくり、このまとめに向けて子どもが学習活動を進められるような課題を設定してみるのもよい。

課題設定と同時にまとめも一緒に考えてみるのも有効な方法である。もし、まとめがうまく考えられなければ（書いてみて、書けなければ）、課題設定を見直す必要があることに気がつく。



【図5】3つの課題設定例について、まとめを考える

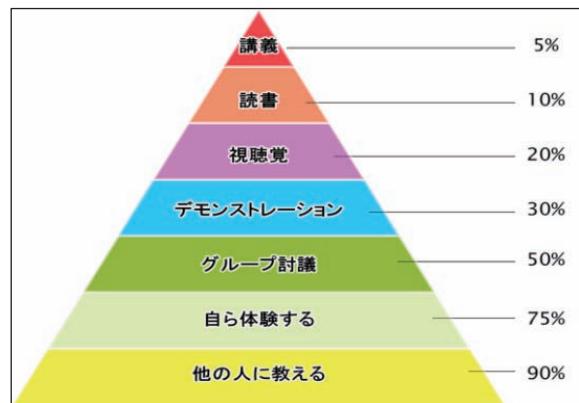
<課題設定チェックリスト>

- そもそも、本時の「ねらい」は明確だろうか？
- 子どもが解決可能な課題になっているだろうか？
- 課題とまとめが正対しているだろうか？

4 学習活動(自力解決・交流)を位置づける

(1) 学習定着率を高めるために(ラーニング・ピラミッド)

アメリカ国立訓練研究所(National Training Laboratories)の研究によって、いわゆる講義、資料や書籍を読むことに比べ、グループ討議、体験、他の人に教えるなど、より能動的・主体性が必要なことになるほど学習定着率が高い(=教育効果が高いと)言える研究結果が出ている【図6】。



【図6】ラーニング・ピラミッド

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現のために(実現したい子供の姿カード)

独立行政法人教職員支援機構(NITS)次世代型教育推進センターでは、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の質的改善により実現したい子供の姿を、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」のそれぞれにおいて、ピクトグラムでイメージ化している【図7】。学習指導案作成時など授業づくりで活用することにより、主体的・対話的で深い学びをより明確に位置付けることが期待できる。

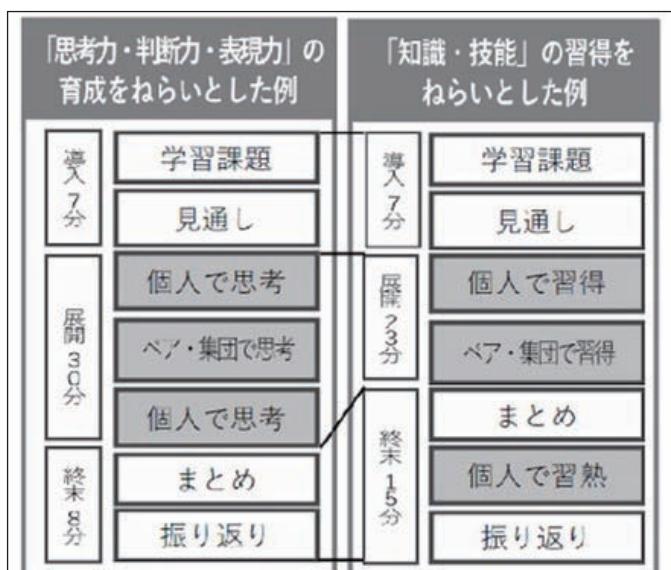
主体的な学び	対話的な学び	深い学び
興味や関心を高める	互いの考えを比較する	思考して問い合わせる
見通しを持つ	多様な情報を収集する	知識・技能を習得する
自分と結び付ける	思考を表現に置き換える	知識・技能を活用する
粘り強く取り組む	多様な手段で説明する	自分の思いや考え方と結び付ける
振り返って次へつなげる	先哲の考え方を手掛かりとする	知識や技能を概念化する
	共に考えを創り上げる	自分の考えを形成する
	協働して課題解決する	新たなものを創り上げる

【図7】実現したい子供の姿カード(独法)教職員支援機構WEBページより

(3) 適切な時間配分(タイムマネジメント)

「小学校(中学校)教育課程編成の手引き(令和2年度 北海道教育委員会)」をもとに、学習過程の時間配分について、ねらいや評価規準をもとに適切に配分することが重要であることを説明した【図8】。

思考力・判断力・表現力の育成をねらいとした授業では、展開の「自力解決・交流」の時間を十分に確保する必要がある。一方で、知識・技能の習得をねらいとした授業では、展開の「自力解決・交流」についてはややコンパクトにすることで、終末の「習熟(まとめの後の場面であり、これを振り返りの一つとして捉えてよい)」を確保することができる。



【図8】1単位時間で完結できる導入・展開・週末の時間配分(小学校(中学校)教育課程編成の手引き 令和2年度 北海道教育委員会)

5 振り返りを充実させる

振り返り充実のポイントとして、①学びの成果を実感させ、②学んだことや意欲・問題意識等を次につなげられるよう、視点を設けることとした。

所員の実践をもとに、振り返りシートの最上段に記載例を掲載しておくことで、子どもが振り返りの視点をその都度確認しながら記載できるようにしている事例を紹介した。振り返りの視点が明確になることで、子どもが記載する上でも、教師がコメントを添える上でも、先述のポイント①、②に沿ったものになりやすいと考えられる【図9】。

【図9】 振り返りシート（所員の実践例より）

6 1単位時間の授業づくり（演習）

受講者が本講義の内容の深化を図れるよう、1単位時間の学習指導案をつくる演習を行った。学習指導案の形式は、当センターで研究推進している「板書型指導案」を用いた【図10】。

板書 横型

本時の目標 ○実験を通して、鏡に映った像は、鏡の面で折り返したときに物体と重なる位置であることを理解させる。
○ものがどの方向からも見えるのは、ものの表面でいろいろな方向に乱反射しているからであることを理解させる。

「実際に存在しないものが、鏡の奥に見えている。
どのようにして見えているのだろうか。」

説明、下線、「像」
P183

実験計画(今回はTから説明)、結果はプリントに整理、TV映写
(参考用)

課題 鏡でできる像が見えるしくみや、ものがどの方向からも見えるわけは、どのようにになっているのだろうか。

自力解決 **交流**

<実験><結果>
鏡で像ができるときの光の道すじ

<考察> ○鏡でできる像
まとめ ○位置...鏡の面で折り返したときに、物体と重なる位置。
・見えるしくみ...鏡で反射した光が物体からまっすぐ進んできたように見える。
○ものがどの方向からも見えるわけ...ものの表面でいろいろな方向に乱反射しているから。(P184)

[考察]③で考えた光の道すじを発表しあう。(グループ全体)
[説明]③の光の道すじの正解を確認。

[説明、下線] P184「乱反射」
[説明]日常生活との関連
P184 反射板のしくみ(関連づけ)
反射板実物を提示して説明。

[補足説明] P184(なるほど)光の道すじが目に見えるわけ(関連付け)

<振り返り>定着問題(ワーク)

B評価 光源からの光や物体で反射した光が目に届くと物体が見えることを理解し、光の道すじや像の位置を説明している。
【知・技】

	課題把握	課題追求	課題解決	振り返り
主体的な学び	1 学ぶことに興味・関心を持たせる 3 見通しを持たせる	4 粘り強く取り組ませる		2 自己のキャリア形成の方向性と関連付ける 5 自己の学習活動を振り返り、次につなげさせる
対話的な学び		6 ペアや班で考えさせる 7 先生との対話から考えさせる 8 先哲の考え方から考えさせる 9 多様な表現方法を用いて話し合わせる	6 学級全体で考えさせる	
深い学び		11 情報を精査して考えを形成させる 12 問題を見いだして解決策を考える	10 知識を相互に関連付けてより深く理解させる	

【図10】「板書型指導案」を用いた、1単位時間の授業づくりの例

<1単位時間の授業づくりチェックリスト>

- 本時で身につけさせたいことは 何か。
- 課題設定では、How課題とすることができるかどうかを検討。
- まとめは課題に正対しているかどうか。
- 学習活動は、主体的・対話的で深い学びであるかどうか。
- 振り返りまでできるかどうか（タイムマネジメント）。

学習指導（授業づくり）-6

「明日の授業が楽しみになる 1単位時間の授業づくり」 —アクティブラーニングの視点から 学習規律を考える—

岩内町立岩内東小学校 教諭 武田麻衣子

はじめに

- 今までの「いいクラス」では、学力は高まらない。
- そもそも「いいクラス」ってなんだろう。
- 「いいクラス」だけでは「アクティブラーニング」はできない。
- しかし多様な子どもに対応しなくてはならない今、集団での学びは欠かせない



① クラスの状態をジャッジ！

<p>小 ↑ 学 習 成 果 ↓ 大</p>	<table border="1"> <tr> <td style="background-color: #0070C0; color: white; padding: 5px;"> 自治性が 低い学級集団 </td><td> <ul style="list-style-type: none"> □全体的に学級のルール・学習規律が守られず、不安定。 □学び合う方法が定着していない □子どもどうしの交流は少ない。硬さがある </td></tr> <tr> <td style="background-color: #0070C0; color: white; padding: 5px;"> 自治性が 中程度の学級集団 </td><td> <ul style="list-style-type: none"> □学級のルールは定着してきたが、大人がいなければ守られず、逸脱する子もいる。 □仲のいい子ども同士の交流は活性化するが仲間内に閉じている。 </td></tr> <tr> <td style="background-color: #0070C0; color: white; padding: 5px;"> 自治性が 高い学級集団 </td><td> <ul style="list-style-type: none"> □自分たちだけでも学習のルールを守ることができる。 □グループが開かれ始め、役割交代ができる。（リーダーが固定化しない。） </td></tr> <tr> <td style="background-color: #0070C0; color: white; padding: 5px;"> 自治性が とても高い学級集団 </td><td> <ul style="list-style-type: none"> □ほとんどの子どもたちが、ルールを守り、建設的な行動ができる。 □学級全体に交流が広がる。 </td></tr> </table>	自治性が 低い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □全体的に学級のルール・学習規律が守られず、不安定。 □学び合う方法が定着していない □子どもどうしの交流は少ない。硬さがある 	自治性が 中程度の学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □学級のルールは定着してきたが、大人がいなければ守られず、逸脱する子もいる。 □仲のいい子ども同士の交流は活性化するが仲間内に閉じている。 	自治性が 高い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □自分たちだけでも学習のルールを守ることができる。 □グループが開かれ始め、役割交代ができる。（リーダーが固定化しない。） 	自治性が とても高い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □ほとんどの子どもたちが、ルールを守り、建設的な行動ができる。 □学級全体に交流が広がる。
自治性が 低い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □全体的に学級のルール・学習規律が守られず、不安定。 □学び合う方法が定着していない □子どもどうしの交流は少ない。硬さがある 								
自治性が 中程度の学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □学級のルールは定着してきたが、大人がいなければ守られず、逸脱する子もいる。 □仲のいい子ども同士の交流は活性化するが仲間内に閉じている。 								
自治性が 高い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □自分たちだけでも学習のルールを守ることができる。 □グループが開かれ始め、役割交代ができる。（リーダーが固定化しない。） 								
自治性が とても高い学級集団	<ul style="list-style-type: none"> □ほとんどの子どもたちが、ルールを守り、建設的な行動ができる。 □学級全体に交流が広がる。 								

河村茂雄「アクティブラーニングのゼロ段階」より一部引用

② 「昔のいいクラス」では足りない。

<p>旧来の学習規律 (旧などと書くが、これ ができないないクラスは 9割方悲惨な結果になる と感じている。)</p> <p>ここから一歩先へ！</p>	<ul style="list-style-type: none"> □時間厳守 □人の話を最後まで聞く（相手が先生でも子どもでも） □整理整頓 □場に即した言葉遣い □許可を得ず離席しない □許可を得ず教室を出ない □他者に対して攻撃的・批判的でない。 □返事やあいさつ、感謝の言葉を述べることができる。 	<p>他者の学ぶ権利を侵害しな いために最低限必要な規律。 互いにマイナスにならない関 係。 最低限ここを目指す。</p>
<p>アクティブラーニ ングを成立させ るための学習規律</p>	<ul style="list-style-type: none"> □ルールが内在化している。（守るきまりの意味を知り、自主的に守ろうとする。） □クラスのメンバーの親和性が高い。 (誰とでもどの集団でも学びが成立する。みんなでやろうというモチベーションが高い。) □他者から学ぼうとする姿勢が育っている。（モデル学習が成立する。） □自分の役割を見つけて、工夫して取り組もうという姿勢がある。 □自分の考えややり方を積極的に提案することができる。 	

③状態に合わせた集団での学びを展開

自治性が低い学級集団	まだルールが未定着。この段階での実践は危険。教員が与えた一定の枠の中で課題に取り組ませる。 ☆一斉活動の中にグループ・ペア活動を一部取り入れる。 *教員はリーダーシップを発揮する。
自治性が中程度の学級集団	学習に必要なルールを意識させながら徐々に内在化させていく段階。子どもに委ねる部分を増やす。 ☆授業の中に子どもたちだけで考えさせる部分を取り入れる。「教えて考えさせる」市川2008 ☆グループ討議を取り入れる。 *教員はファシリテーター的な役割。
自治性が高い学級集団	ルールが内在化し、学級全体の学習活動が整然かつ活発に進む。 ☆学習活動の中に、クラス討議を取り入れていく。 ☆取り組み方やメンバー構成などを子どもたちに委ね始める。 *教員はファシリテーター。足場を作り、うまく消えていく。
自治性がとても高い学級集団	一人一人の自律性が高く、協同活動もうまくできるようになっている。より学習を深められる段階。 ☆時に学習テーマも子どもに委ねてみる。（授業の延長線となる活動、社会のまとめなど） ☆ディープアクティブラーニングの段階。学習領域の内容だけでなく、個人の心情や価値観を交流していく。 *教員はアドバイザー的役割。

活動の際に2、3の基本ルールを守るように事前指導・事後の振り返りをして、ルールを徹底させる。

私は……
「今週のルール」というように、毎週一つずつ掲示しています。
「最後まで」「うなづきながら」などスモールステップで一個ずつ！

河村茂雄「アクティブラーニングのゼロ段階」より一部引用

終わりに（集団作りで覚えていたいこと）

- 先生が安心できるクラスは頭打ちがやって来る。（子どもが大人の想定の範囲内からでないうちは、本当の伸びではないということか。）
- 確かなアセスメント。
- 引き出しの中身を増やし、マッチング！
- 自分で、自分たちでできた！で喜べる子に。

結果は数年後の子どもにしか分からない。目の前の数値や一見いい状態に左右されない。

指導と評価～入口編～

研修講座「授業づくり」 岩内町立岩内西小学校 鶴見卓哉

以下は当日の研修講座のパワーポイント資料をまとめたものです。

(1) 初任者の頃の悩み

初任者だった頃、右のような悩みをもっていました。
「どうして自分はうまくいかないのだろう…」と悩む日々。
諸先輩方や研修、本などで学んだことを紹介していきます。少しでも参考になることがあれば幸いです。

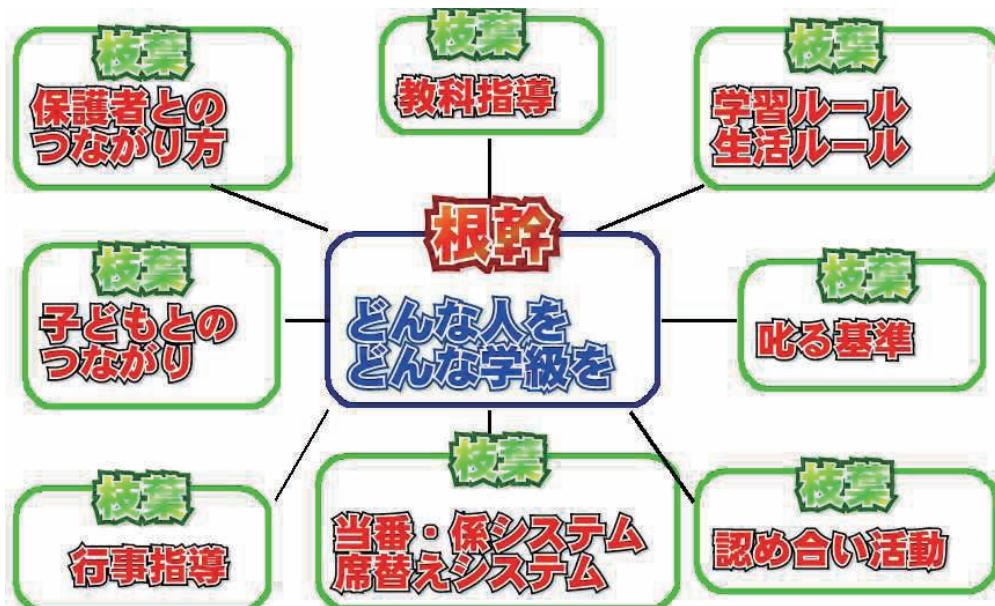


(2) どっちが大切？

同じく初任者だった頃、授業づくりが大切なのか、学級づくりの方が大切なのか、悩んだ経験があります。学級づくりという概念がなく、とりあえず次の日の授業の準備をするだけで精一杯という日々が続きました。そして、「授業を通して学級をつくる」ということ、また「学級づくりを通して授業をつくる」その両方があるということに気づきます。でも順番が大切でした。



(3) 学級づくりが最優先

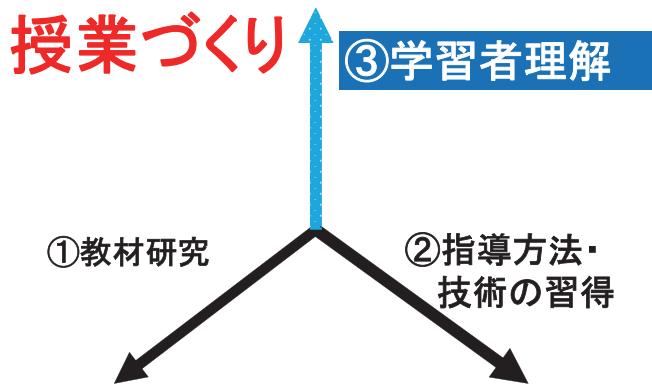


どんな人を育てたいかという出発点から始まり、そのためにはどんな学級をつくらなければならぬのかと理想を掲げ(根幹プランニング)、それを目指すためには、どんな授業を、どんなルールを、どんなシステムを、どんな行事指導を…(枝葉プランニング)という順でプランニングを進めていきました。

(4) 授業づくりでは何が大切？

授業づくりといえば、①教材研究、②指導方法や技術の習得ということが頭に浮かびます。しかし、一番大切で、かつ、子どもたちを伸ばすのに有効だったことは、③学習者理解でした。

クラスにどんな子がいて、どんなことを得意にしているのか、どんなことを課題にしているのか、理解をしていくことで、子どもたちとの関係も良くなり、授業づくりにも生かされていきます。

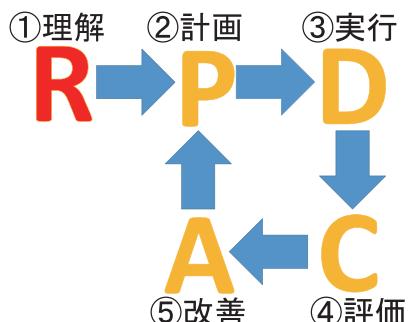


(5) PDCAサイクルの前に

学校でも取り入れられているPDCAサイクルの前にR(理解)を設け、学習者の理解から始めると、その後の計画や実行、評価、改善まで効果的に進めることができました。

では、実際に学習者である子どもたちを理解するにはどうすればよいのでしょうか。

ちょっとした意識を変えるだけで、授業中でも授業以外でも子どもたちを理解することができます。



(6) 授業中にできる学習者理解とは？

俵原正仁氏の「楽しい授業づくりのツボ」という本によると机間巡回の「視」は「指」と表記します。つまり子どもたちの様子を見てまわりながら指導をしていくということです。そしてそのスピードは速く。1回目まわったときに何もしていなかった子が2回目にまわったときに、鉛筆で書き始めていたら褒めることができます。

②の目配りでは、教師が立っている場所から、目線をS字型になるように目を配ります。そうすることで、学級全体に目が行き届きます。

そして③の立ち位置とは、教師の立ち位置です。黒板の前だけでなく、時には後ろから話をしたり、時には発表する子の近くにいくなど工夫することで、子どもたちの姿を理解することができます。

- BEST 3**
- ①机間巡指
 - ②目配り S字型
 - ③立ち位置

(7) 授業中以外にできる学習者理解とは？

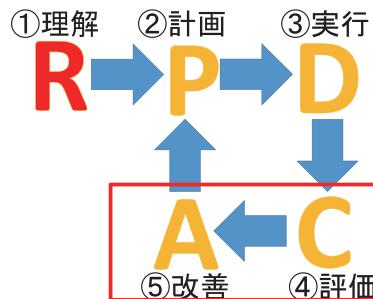
授業中以外の時間でできる学習者理解についてです。まずは、何と言っても子どもたちとおしゃべりをすることです。朝や休み時間を使って、おしゃべりをします。そうすると子どもたちが好きなものや苦手なものも教えてくれます。

そして、保護者とつながることです。保護者とつながることで、関係がつながり、子どもの様子を教えてくれます。また、日常の様子をノートにメモしておくことです。その記録方法を後の(9)の項で説明します。

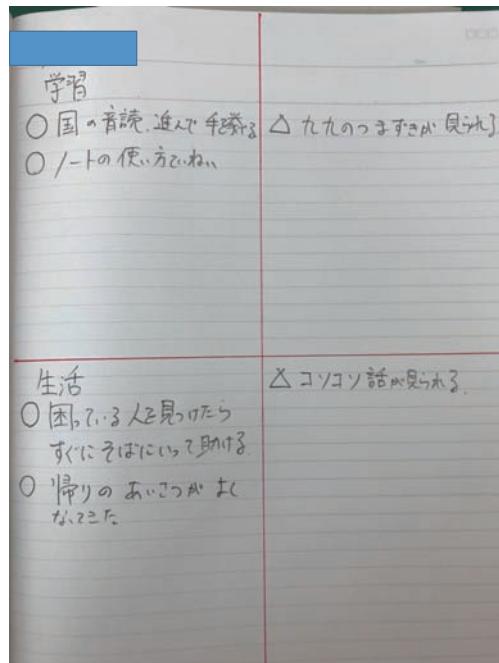
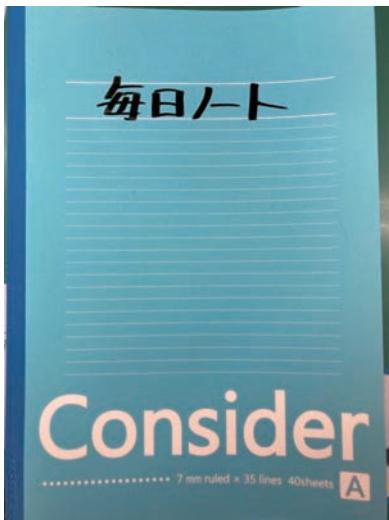
- BEST 3**
- ①子どもおしゃべり
 - ②保護者とつながる
 - ③記録化

(8) 学習評価について

ここまで、指導を行う前に学習者の理解をすることが大切であることに触れてきました。そして、授業計画を立て(P)、授業を行う(D)のですが、初任者の頃、この④評価と⑤改善がうまくいかなく、悩むことが多くありました。通知表を書く時期になって、慌てて「どうしよう…」と思うこともありました…。



(9) 効果的な毎日ノート



年度の初めに1冊のノートを用意します。そのノートにクラス全員分(一人1ページ)の欄を作成します。1ページを四分割して、左上には学習面の良いところ、右上には学習面の課題点、左下は生活面の良いところ、右下は生活面の課題点を書きます。

1日放課後10分だけ時間をとり、気づいたことをどんどん書いていきます。平均して3~4人くらいです。時間がとれないときは、5分、いや3分で構いません。それを毎日の習慣として続けることで、子どもの理解につながるだけでなく、評価の時期には所見にとても役立つノートができあがっています。

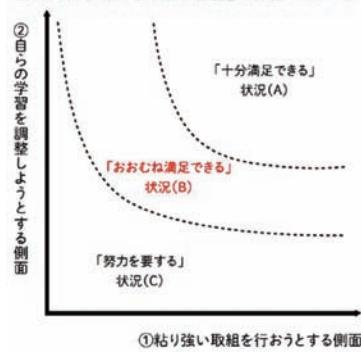
(10) 主体的に学習に取り組む態度の評価①

知識・技能、思考力・判断力・表現力について、基本授業の様子やテスト、ノート、ワークシートで評価します。

そして主体的に学習に取り組む態度の評価の仕方が難しいです。

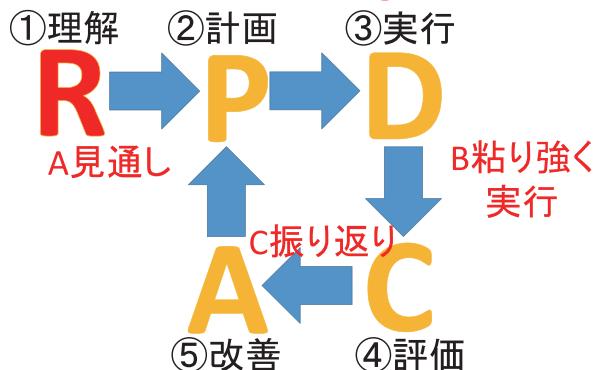
主体的に学習に取り組む態度とは、自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしている姿と示されています。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ



(11) 主体的に学習に取り組む態度の評価②

簡単に捉えると、主体的に学習に取り組む態度とは、先ほど紹介したRPDCAサイクルと似ていると感じました。子どもが授業の中で学習課題により見通しをもち、粘り強く実行し、そして振り返って次の学習につなげていくというイメージです。A評価となるには、ハードルが高めというのが私の印象です。やはり、以前の関心・意欲・態度とは違います。



(12) 効果的な評価法

指導に生かす評価

机間巡査などで児童の様子を見取り、本時の課題を達成できるように、必要な手立てを考え、活かす。

記録に残す評価

指導した内容について児童生徒の達成状況を見取り、全員分記録にのこし、総括する評価。単元のどこで設定するか、精選する。

学習の評価には二種類あります。それは「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」です。指導に生かす評価とは、(6)「授業中にできる学習者理解」のイメージです。そして、記録に残す評価とは、指導した内容について児童生徒の達成状況を見取るもので、単元計画の中で毎時間行うではなく、何時間目を記録に残すかを設定するので、負担軽減にもなりますし、見通しをもつことができます。

(13) そして改善

ここまでをまとめると、R(学習者理解)から始まり、子どもの実態に合わせてP(計画を立て)、指導をD(実行)します。そして、学習者や授業者のC(評価)を行います。最後はA(改善)です。子どもに合わせて授業を行いますが、上手くいかないこともあります。改善につなげるためにはフィードバックがおすすめです。簡単なフィードバックとしかたとしては右の通りです。このようにフィードバックを行うことで、授業改善にもつながり、より子どもたちを伸ばしたり、よりよく評価できるようになってきます。

次は、本講座で、実践交流の際に扱った授業づくり(働き方の観点から)をご紹介させていただきます。

フィードバック法

- ① 良かったところ3つ書く。
- ② 課題を3つ書く。
- ③ それを受けてどうしていくかを3つ書く。

授業づくり(働き方の観点から)

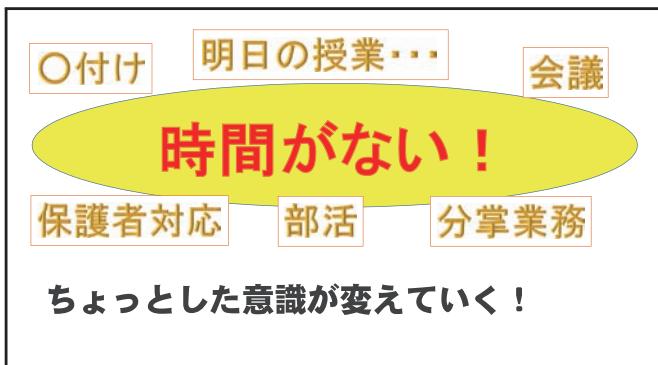
以下は当日の研修講座内で実践交流のコーナーで紹介させていただいたものです。

(1) 時間がない！

ここで紹介させていただくことは、あくまでも私の実践です。実態も環境も違うので、使えそうなものがあればという感覚で読んでいただけたらありがとうございます。

子どもが帰った放課後も、丸付け、明日の授業、会議、保護者に連絡、分掌業務…などに追われ、とにかく時間がない！ということに悩まれている方はいらっしゃらないでしょうか。

中学校ならこれに部活が入り、家庭のために早く帰らなければ！という方もいらっしゃるかと思います。そんな「時間がない」の中で、少しでも効果的な働き方を模索して、実践してきたことを紹介させていただきます。



(2) 働き方ルールを決める！

そこで、まずやったことは働き方のルールを決めたことです。自分のプライベートを含めた1日のスケジュールを細かく決めたのです。

右のように、起床から仕事、帰宅、就寝まで、これを基に生活をしました。たとえ仕事が終わっていなくても…

特に**退勤時刻を決める**こと。これが大切です。退勤時刻を決めると、逆算してどんな仕事ができるか、計画を立てることができます。もちろん、緊急を要するような生徒指導が発生したときは、延長する時はありますが、基本はこの退勤時刻を守ります。

働き方ルール（1） 一日のタイムスケジュールを 決めよう！

- ①起床時刻 ④仕事の時間
- ②帰宅時刻 ⑤プライベート時間
- ③就寝時刻

(3) やることをリスト化する！

そして、1日の基本ルーチンを作ります。そして、やることをリスト化していきます。この時間帯にはこんなことをするといったように決めていくのです。

5:15～5:45	授業づくり
5:45～6:00	体づくり
7:00～7:40	教室、印刷
7:50～15:30	授業
15:30～17:20	教室15 記録15 ○つけ20 出席簿5 打ち合わせ15 通信20 授業づくり30
20:00～20:30	残務

働き方ルール（2） やることをリスト化 しよう！

ノート術！4分割法	
朝 放課後	児童 week
生活	△ココロ録が書いた

(4) 短時間で集中する！

人間、集中できる時間は決まっています。そこで、右のように、5分、10分、15分…という短い時間でタイマーをかけ、仕事をスタートさせます。すると、案外、その時間の中で集中して行うことができます。これをタイマー集中法と呼んでいます。庄司寛之氏の本から学んだ実践です。これは、おすすめです！

働き方ルール（3）

タイマー集中法

この仕事は、5分、10分、15分、30分…というように時間を設定して、達成を目指すと集中力が高まります。



(5) 早寝早起き！

私は、朝の時間を大切にしています。5時前に起きて、そこで集中して仕事をします。ということは早く寝ています。9時くらいには子どもと一緒に寝ています笑。朝の30分間は、夜の2～3倍らしいです。これも、精神科医樺沢紫苑紙の本から学んだ実践です。

働き方ルール（4）

早く寝て、早く起きる。
朝は脳のゴールデンタイム
夜の2～3倍の効果！



(6) 授業づくり時間！

基本、授業づくりは1教科10分程度です。まず、どんな力を身に付けさせたいかを決め、簡単な板書計画を立てます。そして、主要な発問を考えることで子どもたちの活動が見えてきます。すると、授業づくりも1日60分程度で終了します。

働き方ルール（5）

授業づくりは1教科10分間

- ①本時の目標設定 こんな力を！
- ②簡単な板書計画
- ③主な発問

(7) コメントの選別！

子どもから集める物はたくさんあります。そこで、自分で○をつけるもの、コメントをするものを決めます。全てコメントを書くということはしません。それ以外はハンコを押すだけです。そして○つけも授業中にできるものは全て終わらせます。

働き方ルール（6）

- ①ノートやプリントなど、コメントするものを決める。
- ②それ以外はハンコ。

(8) 子どもに任せよう！

働き方の時短は、子どもに任せるものは任すということです。自分の仕事を子どもにやらせるのですか？とお叱りを受けそうですが、そうではありません。初任者の頃の自分はつい心配で、全て自分で行っていました。掲示物も、いろいろなクラスの仕事も。でも子どもを信頼して任せてみると、子どもたちでできることはたくさんあります。それが自主性につながり自治的なクラスの育成にもつながります。最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

働き方ルール（7）

- ①子どもに任せるものは、任す。
- ②そして、ほめる。

ここで書かせていただいたことは、上記したように学校としての取り組みや先輩からの助言、そしてたくさんの本から学ばせていただいたことばかりです。参考文献として挙げますのでもし興味がありましたら、読んでみてください。

- 『楽しい授業づくりのツボ』 傑原正仁著 明治図書
- 『学習評価の在り方ハンドブック』 国立教育政策研究所
- 『学級担任のための残業ゼロの仕事ルール』 庄司貴之著 明治図書
- 『神・時間術』 樺沢紫苑著 大和書房

理科の観察・実験準備について

1 器具・材料の計画的な準備

教科書会社の資料「観察・実験器具材料一覧」が便利です。

学習指導要領・教科書の改訂にともない新たに必要になったものについても、「新規掲載」としてわかりやすく示されています。

2年度「新しい理科」観察・実験器具材料一覧			
4年			
単元名	箇所	用意する物	別法など
1 あたたかくなると	観察1	温度計、ヘチマの種子、虫めがね、記録カード 【紙はさみ、デジタルカメラ、植ごて、じょうろ、肥料、支柱】	キュウリ、ツルレイシの種子
	観察2	温度計、虫めがね、記録カード 【紙はさみ、昆虫図鑑など】	
2 動物のからだのつくりと運動	観察1	記録カード	
	観察2	記録カード、人体模型、図鑑 【コンピュータなど】	
	観察3	記録カード、図鑑などの資料 【コンピュータなど】	
3 天気と気温	観察1	温度計、記録カード 【厚紙、輪ゴム】	
	観察2		
4 電流のはたらき	レッツスタート	乾電池(単三形1個)、モーター、プロペラ、乾電池ボックス、導線、セロハンテープ、プラスチックの段ボール、小さい目玉クリップ、竹ひご、タイヤ、小さい箱	
	実験1	乾電池、モーター、検流計、スイッチ、導線、プロペラ、乾電池ボックス 【モーターを載せる台】	記録温度計、百葉箱
	実験2	乾電池、モーター、スイッチ、導線、プロペラ、乾電池ボックス	
	実験3	乾電池、モーター、検流計、スイッチ、導線、プロペラ、乾電池ボックス 【モーターを載せる台】	豆電球、導線つきソケット
	レッツスタート	乾電池(単三形1個)、モーター	豆電球、導線つきソケット
5 雨水のゆくえと地面のようす	レッツスタート	【タブレット型コンピュータやデジタルカメラ】	
	観察1	ビー玉、紙の筋を切った物、プラスチックの入れ物、記録カード	
	2節導入活動	【校庭の土や砂場の砂、砂を入れる入れ物、虫めがね】	
6 植物のくわしと栽培のようす	実験1	プラスチックのコップ、スタンド、ガーゼ、校庭の土や砂場の植物を育てるときに使ういろい ら、ビーカー 【水】	豆電球、導線つきソケット いろいろ種類の土

東書「実験器具・材料一覧表」URL

<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/rika/introduction/download.html#section4>

または、「東書 小学校理科 器具一覧」で検索。



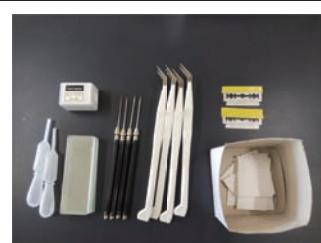
2 顕微鏡観察用具の準備

細かいものがたくさんあるので、その都度準備するのが大変です。写真のように、班ごとに小さいかごの中に一式入れておくと便利です。



【かごの中身】

- ・スライドガラス
- ・カバーガラス
- ・スポット
- ・ピンセット
- ・柄つき針
- ・小さく切ったろ紙
(余分な水を吸い取るときなどに使用)
- ・かみそり(必要に応じて)



3 試薬の準備

先生方から「ヨウ素溶液はどのくらいの濃さで使えばよいですか?」「石灰水を用意するのが時間がかかるし大変」という声をよく聞きますので、この2つについて取り上げます。

ヨウ素溶液	水を加えて、ビールの色くらいにうすめるとよい。 うすめたヨウ素溶液は、褐色ビンなどで遮光保存します。 →プチボトル(ビニールテープを巻いておく)がおすすめ。	
石灰水	水酸化カルシウム ($\text{Ca}(\text{OH})_2$)を多めに容器に入れ、これに水を加えてよく振り、飽和水溶液をつくるべく。解け残りがしずむまでに時間がかかるので、使うまで静置しておき、この状態で常備しておきます。 使うときに、上澄みを別容器に移して使う(駒込ピペットで取っても、そのまま静かに注いでもよいです)。 →石灰水が少なくなったら、水を足しておくとよい。水酸化カルシウムが少なくなったら、足すとよい。 (注意) ふたをして保管しておくこと。ふたをしないと、空気中の二酸化炭素と反応して、白い固体が液面に浮かんでしまいます。	



プチボトル(UCHIDASカタログより...「点滴びん」という名前で掲載)
※5~10mLサイズを、10個入り500円程度で買えます。



色々な薬品を保管でき、すぐ使えます。小さいので整理も楽々！

他に、うすい塩酸、水酸化ナトリウム水溶液、うすい過酸化水素水(オキシドール)などを調製しなければならない場合もあると思います。その他のことも含めて、もしわからぬことがありますたら、お気軽に研修センターまでご相談ください。

主体的・対話的で深い学びにむけた 授業改善の視点

本講座では、授業改善のための指針の一つとして、東北大学大学院情報学研究科と内田洋行教育総合研究所の共同研究『新学習指導要領で育成を目指す資質・能力の具現化と指導方法等に関する研究』（以下「本研究」）を取り上げる。教育の情報化を専門とする東北大学の堀田龍也教授によるもので、新学習指導要領で想定される学習過程を概観した上で、授業改善の視点を抽出している。この視点が、日々の授業を考えるためのヒントになると考えた。

この講義で、まず、「主体的・対話的で深い学び」について再確認するとともに、本研究で示された新学習指導要領における学習過程を紹介する。次に、児童生徒の学びの姿から抽出した授業改善の視点を紹介します。最後に、この授業改善の視点を学習過程へ配置したものを紹介し、かねてより後志教育研修センターでの研究と実践を積み重ねてきた板書型指導案へ反映したものを紹介します。

1 新学習指導要領で想定される学習過程

平成28年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、「新しい社会の在り方を自ら創造することができる資質・能力を子供たちに育むためには、教員自身が習得・活用・探究という学びの過程全体を見渡し、個々の内容事項を指導することによって育まれる資質・能力を自覚的に認識しながら、子供たちの変化等を踏まえつつ自ら指導方法を不斷に見直し、改善していくことが求められる。」として、各教科における学習過程を意識した指導方法の工夫改善の重要性が示されています。そこで、本研究では、新学習指導要領における国語・社会・算数・理科の4教科の学習過程を比較し、以下のように「問題解決的な学習過程」として整理しています。

新学習指導要領における問題解決的な学習過程

課題把握	「課題把握」の過程では、学習課題を提示して、学習のねらいを明確にします。学習に取り組む前に、子供自身が「何を」「どのように」学ぶかという見通しを持つことで、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めます。
課題追究	「課題追究」の過程では、仮説を立て、それに基づいて各種の資料から必要な情報を集め、比較や分類、関連付けたり、試行錯誤したりしながら、考えを深めていきます。これらの活動は子供たち同士で取り組むことも重要です。
課題解決	「課題解決」の過程では、筋道を立てて考えたことをまとめ、導き出した結論を発表したりレポートにまとめたりして表現します。また、互いの結果を基に話し合ったり、相互に評価しあったりする活動を行いながら、より深い学びを実現していきます。

振り返り	「振り返り」の過程では、これまでに学習したことを取り返り、学習したことの意義や価値を実感し、学習内容を確実に定着させます。また、取り組んだ内容を基に新たな課題を見つける等、次の学習活動への活用につなげます。
------	---

これを見ると、新学習指導要領における学習過程も、これまでの単元計画や授業展開と大きく変わるものでないことがわかります。「課題把握」はいわゆる導入の部分であり、展開にあたる部分として、「課題追究」が自力解決や自力思考に当たり、「課題解決」が全体交流などに該当するものです。終末あるいはまとめの部分として「振り返り」が位置付けられています。ここからも、新学習指導要領の求める「主体的・対話的で深い学び」が、これまでの授業研究を否定するものでないことがわかります。

2 「主体的・対話的で深い学び」からみる授業改善の視点

この中教審答申では、「主体的・対話的で深い学び」について、以下のように示されています。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

すると、これまでの授業が否定されるものではなく、これまで連綿と紡がれてきた授業改善の歩みを続ければよいと考えられる。では、学校教育における質の高い学びを実現するためにはどのような方向性を目指せばよいのか。授業改善の視点として、以下のものが示されている。

① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を取り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るために、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだしで解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

子どもたちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれれたりしていくことが重要である。教員はこの中で、教える場面と、子どもたちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

上記に示された記述は、目指す児童生徒の学びの姿とも言えるものです。本研究では、この児童生徒の学びの姿を授業改善の視点として抽出しています。

まず、主体的な学びに関する授業改善の視点として、以下の5つの視点を抽出しています。

- 「1学ぶことに興味関心を持つ」
- 「2自己のキャリア形成の方向性と関連付ける」
- 「3見通しを持つ」
- 「4粘り強く取り組む」
- 「5自己の学習活動を振り返り次につなげる」

次に、対話的な学びに関する授業改善の視点として、以下の4つの視点を抽出し、さらに、「6子供同士の協働を手掛りに考える」については、2つの下位項目を設定されています。

- 「6子供同士の協働を手掛りに考える」
- 「6A ペアや班で考える」
- 「6B 学級全体で考える」
- 「7教職員や地域の人との対話を手掛りに考える」
- 「8先哲の考え方を手掛りに考える」
- 「9多様な表現方法を用いて対話する」

最後に、深い学びに関する授業改善の視点としては、以下の4つの視点を抽出しています。

- 「10 知識を相互に関連付けてより深く理解する」
- 「11 情報を精査して考え方を形成する」
- 「12 問題を見いだして解決策を考える」
- 「13 思いや考えを基に創造する」

なお、本研究では、「各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働きかせながら」という部分については、新学習指導要領における問題解決的な学習過程として整理された「課題把握」「課題追究」「課題解決」「振り返り」のなかで、特定の学習過程に位置付けることは不適当であるとされ、授業改善の視点として抽出することを保留されています。実際の授業改善にあたっては、「見方・考え方」を働きかせるという視点をもつことも必要です。

3 学習過程への授業改善の視点の配置

本研究では、望ましい児童生徒の学びの姿から抽出した13の授業改善の視点を、「問題解決的な学習過程」のいずれか1つの段階に位置づくように配置した表を作成しています。本来的には複数の段階にまたがる視点もありますが、可能な限り、1つの授業改善の視点が2つ以上の学習過程をまたぐことのないように設定されています。問題解決的な学習過程の各段階に位置付けることで、このような授業改善の視点を意識して学習活動を設定することが容易になり、授業デザインがしやすくなるのではないか、授業改善のヒントになるのではないか、と考えます。

この表を活用して授業計画を行う際には、学習過程の各段階において、どの授業改善の視点を使って授業を行うのかチェックし、それぞれの視点の具体的な手立てを活用することでどのような活動が設定できるかを検討します。例えば、「課題把握」の過程には、主体的な学びに関する授業改善の視点が2つ示されています。1単位時間の授業の導入、あるいは、単元計画の第1次では、これらの視点で教材や学習活動を検討し、授業を設計することが授業改善につながると考えられます。

問題解決的な学習過程へ授業改善の視点を配置した表

	課題把握	課題追及	課題解決	振り返り
主体的	1 学ぶことに興味関心をもつ 3 見通しを持つ	4 精力強く取り組む		2 自己のキャリア形成の方 向性と関連付ける 5 自己の学習活動を振り返 り次につなげる
対話的		6 子供同士の協働を手掛かりに考える 6 ペアや班で考える 7 教職員や地域の人との対 話を手掛かりに考える 8 先哲の考え方を手掛かりに 考える 9 多様な表現を用いて対話する	6 学級全体で考える	
深い学び		11 情報を精査して考え方を形 成する 12 問題を見出して解決策を 考える 13 思いや考え方を基に、創造 する	10 知識を相互に関連付けて より深く理解する	

さらに、この表を板書型指導案に合わせたひな型を作成しました。板書の構成と学習過程を合わせながら、授業設計をすることができます。先生方の授業設計、授業改善にお役立てください。

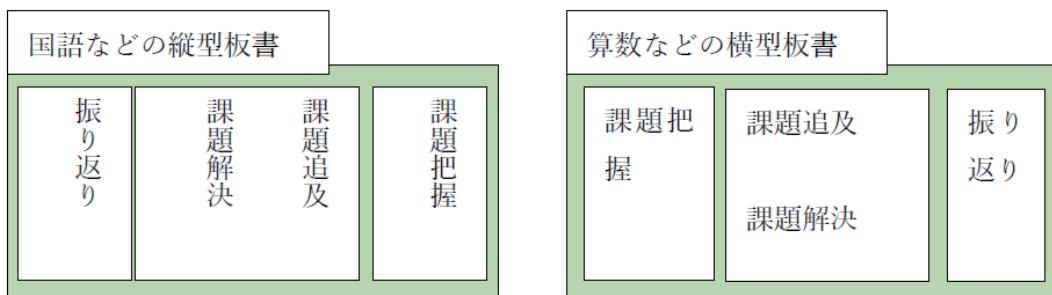
なお、この板書型指導案は、次のような活用の仕方を想定しています。

板書型指導案			
各段階の目標			
B評価			
評議会問題			
主体的学び	1 学ぶことに興味・関心をもつ	4 精力強く取り組む	2 自己のキャリア形成の方 向性と関連付ける
	3 見通しを持つ		5 自己の学習活動を振り返 り次につなげる
対話的	6 子供同士の協働を手掛かりに考える 6 ペアや班で考える 7 教職員や地域の人との対 話を手掛かりに考える 8 先哲の考え方を手掛かりに 考える 9 多様な表現を用いて対話する	6 学級全体で考える	
深い学び	11 情報を精査して考え方を形 成する 12 問題を見出して解決策を 考える 13 思いや考え方を基に、創造 する	10 知識を相互に関連付けて より深く理解する	

配置図を活用した授業計画のポイント

- (1) 本時の目標や評価規準を確認する。
- (2) 課題把握、課題追及、課題解決、振り返りの各段階において、どの授業改善の視点を使って授業を行うか、チェックする。また、それぞれの視点の具体例チェックリストを活用し、どのような活動を行うか計画を立てる。
- (3) 板書計画を立てたり、発問を考えたりする。

※板書は、3段構成とする。

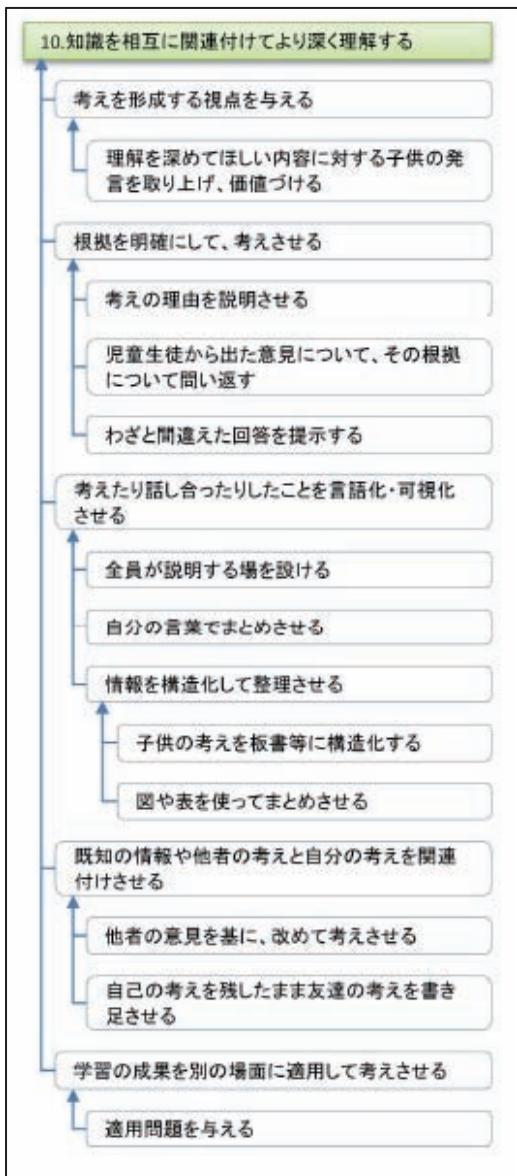


4 授業改善の視点と教師の手立て

今回の講義では、いわゆる「全体交流」の場面を掘り下げます。先ほどの表では、「課題解決」の過程における「深い学び」の視点、「10知識を相互に関連付けてより深く理解する」にあたります。この視点から学習活動を改善する教師の手立てとしては、次のものが挙げられています。例えば、「根拠を明確にして考えさせる」という学習活動を実現するために、「考えの理由を説明させる」「わざと間違えた回答を提示する」といった教師の手立てが有効であるということが示されています。これらの手立ては、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んでいる授業実践事例から、抽出されたものです。ただ、多岐にわたる手立てが挙げられていますので、このうち、全体交流での学習活動を想定して、さらに10の手立てを選び、整理しました。日常の授業改善として、普段の授業を設計する際に、全体交流の活動の質を高めるために、これらの手立てとして検討することが有効だと考えます。

本研究で示された手立て

全体交流での活動を想定して整理した手立て



10 全体交流（深める）

- 子どもの発言を取り上げる
- わざと間違えた回答を出す
- 説明する場を作る
- 自分の言葉でまとめさせる
- 図や表を使わせる
- 黒板に先生が考え方書く
- 子どもに考え方書かせる
- 友だちの考え方を見て、改めて考え方させる時間を持つ
- 友だちの考え方をノートに書かせる
- ほかの問題を考えさせる

【参考資料】

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成 28 年 12 月 21 日、中央教育審議会

「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための教師の手立てと ICT 活用（vol.1～3）一東北大学大学院情報科学研究科×内田洋行教育総合研究所 共同研究一」2018 年 6 月、内田洋行教育研究所

https://www.manabinoba.com/edu_watch/017578.html

学習評価について

1 学習評価の目的

学習評価には、「教師が指導の改善を図る」という側面と、「児童生徒自身が自らの学習を振り返って、次の学習に向かうことができるようにする」という側面があります。

学習指導要領第1章総則には、「教育課程の実施と学習評価」として、以下のように書かれています。

(1) 児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとめを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

ここでは、教師が、各教科等の学習状況を把握する観点から学習の過程や成果を評価することで指導の改善を図ること、すなわち「指導と評価の一体化」が求められています。そのため、学習評価の改善にあたっては、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることができます。

他方、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていくようになります。学習意欲の向上を図ることも求められます。そのため、教師が児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価することが必要なのです。

2 学習評価の基本的な考え方

○カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

カリキュラム・マネジメントとは、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」であり、そのなかには、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくことも位置付けられています。



「学習評価の在り方ハンドブック」より

それぞれの学校では、日々の授業のなかで、児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善、あるいは、学校全体としての教育課程の改善などに生かすことが求められています。「学習指導」と「学習評価」は学校教育の根幹であり、カリキュラム・マネジメントの中核的な役割を担っています。

カリキュラム・マネジメントの観点からも、学校全体として組織的かつ計画的な取組を進め、学習評価について共通認識を深め、具体的な進め方や方法を整えていく必要があるでしょう。

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価

指導と評価の一体化を図るために、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくというサイクルが大切だとされています。

3 学習評価について指摘されている課題と改善の基本的な方向性

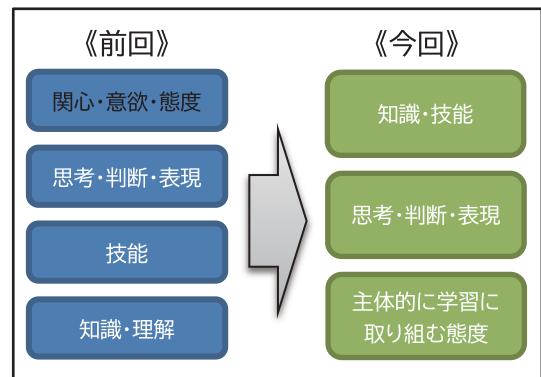
学習指導要領の改訂を受けた中教審の初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」がとりまとめられました。そのなかには、学習評価について指摘されている課題として、以下のものが挙げられています。

- 学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない
- 現行の「関心・意欲・態度」の観点について、挙手の回数や毎時間ノートをとっているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭しきれていない
- 教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい
- 教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できない

そして、学習評価を真に意味のあるものとすることが重要であるとして、学習評価の改善の基本的な考え方として、【1】児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと、【2】教師の指導改善につながるものにしていくこと、【3】これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと が挙げられています。特に、3点目については、従来の学習評価の方法などについて、大きな見直しを迫るものとして着目したい。

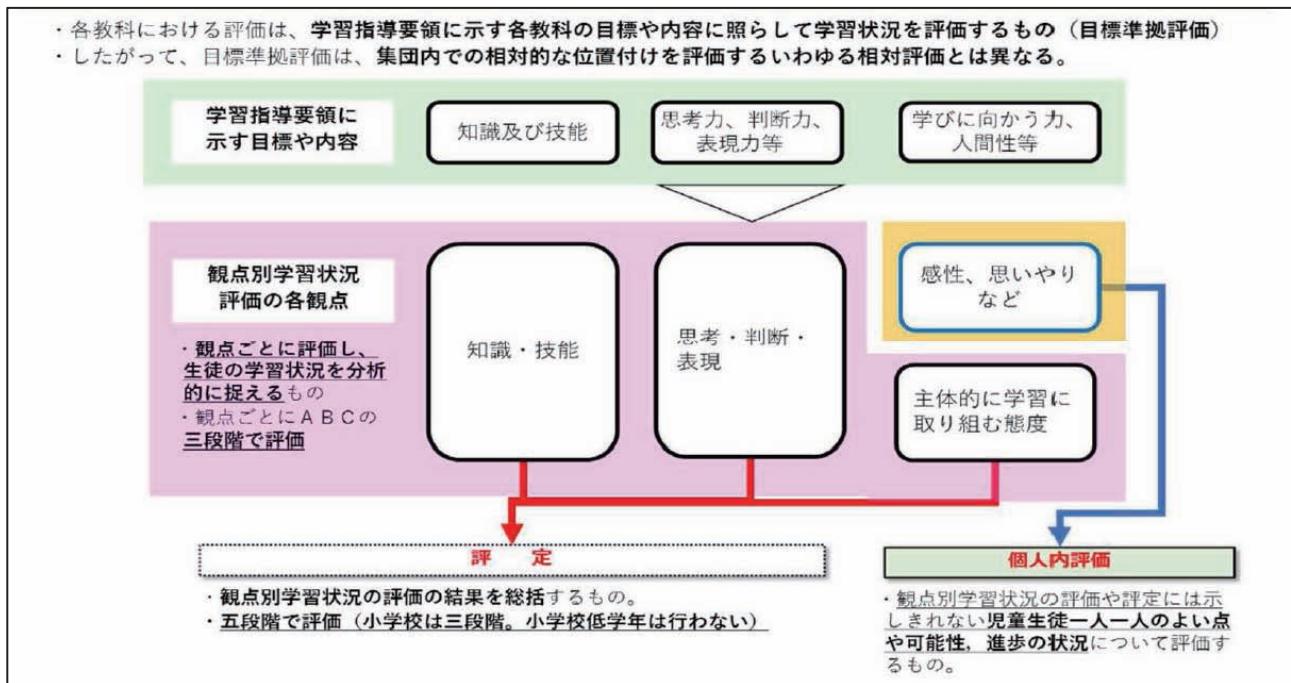
4 学習評価の基本構造

このたびの学習指導要領の改訂においては、育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に整理されました。この3つの柱で、全ての教科等の目標や内容も整理されました。それに伴って、観点別学習状況の評価の観点も大きく変化しました。全ての教科等が資質・能力の3つの柱に沿った「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に改められました。ただし、学習指導要領に示す目標や内容に準拠した評価であることは変わりません。



なお、観点別学習状況の評価には示しきれない部分は、「個人内評価」として評価するとされています。特に、「学びに向かう力、人間性等」は、「主体的に学習に取り組む態度」として評価する部分と、一人一人のよきや可能性、個人内の成長など「個人内評価」を通じて見取る部分があると整理されています。

各評価における評価の基本構造



文部科学省「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」より

5 観点別学習状況の評価方法の改善について

① 「知識・技能」の評価の方法

「知識・技能」は、従前の「知識・理解」と「技能」をあわせたものです。各教科等における学習の過程を通じた個別の知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価します。

《評価方法の工夫（例）》

○ペーパーテストの工夫

事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮した

○実際に知識や技能を用いる場面を設ける工夫

- ・児童生徒の文章による説明をする場面
- ・観察・実験、式やグラフでの表現をする場面

② 「思考・判断・表現」の評価の方法

「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。

《評価方法の工夫（例）》

- ペーパーテスト以外の評価方法を取り入れる工夫
- 論述やレポート、発表、グループでの話し合いの活動を取り入れる工夫
- 作品の制作や表現等の活動を取り入れる工夫
- 話し合い、作品の制作や表現等を集めたポートフォリオを活用する工夫

【ポートフォリオ評価】

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。

そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

③「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要です。

《評価方法の工夫（例）》

- ノートやレポート等における記述、授業中の発言を見取る
- 教師による行動観察を行う
- 児童生徒による自己評価・相互評価の状況の考慮する工夫
- 各教科等の特質に応じた多様な方法を工夫する

④評価時期の工夫について

学習指導要領では、「単元や題材などの内容や時間のまとめを見通しながら評価の場面や方法を工夫」することが示されています。毎時間、すべての観点について評価のための「記録」を残すことは多大な手間と時間がかかり現実的ではありません。その分、指導や支援にかける労力も使われてしまいます。

日々の授業の中では児童生徒の学習状況を把握して指導に生かすことに重点を置きつつ、各教科における「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価の記録については、原則として単元や題材などのまとめごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行います。

具体的には、単元計画のなかで単元全体を見通して、どの時間にどの観点について記録を残すための評価を行うのかを位置付けておくことが求められます。

6 参考資料 一覧

学習評価について、文部科学省及びその関連機関から様々な情報提供がなされています。概説的なものから教科ごとの具体的な方法まで多岐に渡ります。必要に応じて、参考にしていただき、学習評価の工夫改善にお役立てください。

「学習評価の在り方ハンドブック」(小・中学校編)

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-01.pdf



学習評価について、概要をつかむことができる読みやすい資料です。今回の学習指導要領改訂にかかるわって、大きく変わった学習評価について、全体像を知ることができます。



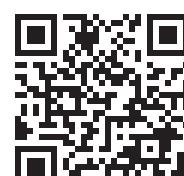
「指導と評価の一体化」ための学習評価に関する参考資料 (小学校編・中学校編)※各教科等別

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>

(国立教育政策研究所>各部・センター案内 教育課程研究センター >指導資料・事例集)

小学校編	中学校編
算数 [PDF 1.72MB]	算数 [PDF 1.72MB]
自然 [PDF 4.67MB]	自然 [PDF 1.53MB]
生活 [PDF 3.40MB]	生活 [PDF 3.68MB]
社会	社会 [PDF 5.21MB]
技術工芸 [PDF 4.66MB]	技術工芸 [PDF 4.90MB]
	地図 [PDF 6.07MB]

このサイトに、小・中、各教科等別にPDF形式で掲載されています。学習評価の基本的な考え方や評価規準の作成及び評価の実施等について解説しているほか、単元や題材に基づく学習評価の具体的な事例が紹介されています。実際の授業改善、評価方法の工夫改善の参考になる資料です。



NITS(独立行政法人 教職員支援機構)オンライン講座

「新学習指導要領に対応した学習評価(小・中学校編):新学習指導要領編 No33」

<https://www.nits.go.jp/materials/youryou/033.html>

The screenshot shows the NITS website interface. At the top, there are links for 'About the Organization', 'Contact', 'English', and 'Site Map'. Below that, there are tabs for 'Research & Seminars', 'Online Seminar', 'Support Activities', 'Research & Studies', 'Information Disclosure', and 'Information Provision'. A QR code is visible on the right side of the page.



令和3年度 教育課程編成の手引 北海道教育委員会

https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/gky/R03_tebiki.html

The screenshot shows the Hokkaido Education Commission's website. At the top, there are links for 'Top', 'Search', 'Category Search', 'Organization Search', 'Emergency Information', and a search bar. The main navigation menu includes 'HOME', 'Ministry', 'School Education Bureau', 'Curriculum', 'R03 Elementary and Secondary School Curriculum Planning Guide'. The page title is 'R03 Elementary and Secondary School Curriculum Planning Guide'. On the left, there is a table of contents for the guide, listing chapters such as 'Basic Considerations for Curriculum Evaluation', 'Basic Structure of Curriculum Evaluation', 'Implementation of Curriculum Evaluation', 'Basic Structure of Curriculum Evaluation', 'Evaluation Methods', and 'List of Subjects'. On the right, there is a sidebar with categories like 'Curriculum', 'Curriculum Information', 'Curriculum and Main Duties', 'Curriculum Improvement', 'Curriculum Planning', 'Curriculum Planning Guide', 'Curriculum Improvement', 'Curriculum Improvement', and 'Curriculum Improvement'.

今年度は、学習評価について大きく取り上げられています。基本的な考え方から、各教科別の評価方法についての解説も掲載されています。



学習評価の進め方の例

Step1 単元(題材)の「指導と評価の計画」を作成する

単元の目標と児童生徒の実態をふまえた上で、単元の評価規準を適切に位置づけることが大切です。その際、以下の2点がポイントとなります。

○目標達成に効果的な指導計画の作成

何を、どのような順序で、どのような学習活動を通して学ばせると効果的に単元の目標を達成できるのか考える。

○無理のない評価計画の作成

評価を行うために必要な時間を考え、単元全体でバランスよく評価を位置づける。評価の種類としては、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」があります。毎時間、児童全員分の記録を取り、総括の資料とするために蓄積することは現実的ではありません。単元の中で、「記録に残す評価」を行う時間を精選する必要があります。その際、単元の評価規準を位置づけている児童の姿が、最も表れやすい時間に設定する必要があります。

Step2 「指導と評価の計画」を基に授業を行う

評価のあるべき姿は、授業において目標にあげた「児童に身に付けてほしいこと」を、そのまま評価の対象とすることです。つまり、「何を評価すればよいのか」と難しく考えすぎずに、掲げた目標に達成したかどうかを確かめることができます。

評価規準を作成して実際に評価するには、児童を評価するときの実現状況を設定します。その際、A評価、B評価、C評価全てについての評価基準を作成するのではなく、評価規準に示したものを「おおむね満足できる」状況(B)として捉え、それを踏まえてAとCを判断します。

実際の評価の判断の方法は以下の通りです。

- ① 設定した評価規準に照らして、まず、「おおむね満足できる」状況(B)か、「努力を要する」状況(C)かを判断する。
 - ② 「おおむね満足できる」状況(B)と判断されるもののうち、児童の学習状況の実現の程度について、質的な高まりや深まりをもっていると判断されるものを「十分満足できる」状況(A)とする。
- 評価を残す方法としては、座席表の活用、児童名簿の活用が考えられます。あらかじめ、どの場面で評価するかを決めておき、座席表に児童の状況を記載します。その際、B評価は記録せず、A評価とC評価の記録をすると評価に時間が取られることが解消されます。

Step3 単元の終わりに観点別評価を総括する

	1時間目		2時間目		3時間目		4時間目		5時間目		
	知識	思考	知識	思考	知	思	主				
Aさん	B 2点	B 2点	A 3点	B 2点	A 3	B 2	B 3				
Bさん	B 2点	A 3点	A 3点	A 3点	B 2	A 3	B 3				

【テストの評価規準】

9割以上	A
9割～6割	B
6割以下	C

単元ごとにねらいを明確にして資質・能力を育成し、育成した資質・能力について評価した結果を、単元を終えた後に総括します。

Aを3点、Bを2点、Cを1点とします。

その単元の評価の平均を出します。 2. 5以上が A、1. 5～2. 5がB、1. 5以下がCとします。テストだけで評価するのではなく、テストも単元計画の一つと捉え、評価します。

例1)Aさんの単元の評価

$$\text{知識・技能 } (2 + 3 + 3) \div 3 = 2.66 \text{ (A)}$$

$$\text{思考・判断 } (2 + 2 + 2) \div 3 = 2 \text{ (B)}$$

例2)Bさんの単元の評価

$$\text{知識・技能 } (2 + 3 + 2) \div 3 = 2.33 \text{ (B)}$$

$$\text{思考・判断 } (3 + 3 + 3) \div 3 = 3 \text{ (A)}$$

Step4 学期末(通知表)の観点別評価を総括する

単元ごとに行った評価を、学期末で総括します。単元と同じ計算方法で総括します。

	小数			体積			分数			速さ			前期の評価		
	知	思	主	知	思	主	知	思	主	知	思	主	知	思	主
Aさん	B	A	B	B	B	A	B	A	B	A	B	B	B	A	B
Bさん	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B

この評価が、
通知表の評定と
なります。

【ポイント】

一般的に年間指導計画に書かれている評価規準が B 評価ということを考えると、A 評価の人数は絞られてくることが予想されます。

それぞれの学びの具体例

	課題把握	課題追求	課題解決	振り返り
主体的な学び	<p>1 学ぶことに興味・関心を持たせる <input type="checkbox"/>既習を出す <input type="checkbox"/>「できない」を体験させる <input type="checkbox"/>日常場面で出す <input type="checkbox"/>実物を出す <input type="checkbox"/>疑問を聞く、書かせる <input type="checkbox"/>気付いたことを聞く <input type="checkbox"/>前時のまとめを見直す</p> <p>4 粘り強く取り組ませる <input type="checkbox"/>取り組む計画を立てさせてさせる <input type="checkbox"/>既習している子に既習事項を示す <input type="checkbox"/>止まっている子に友だちの考えを見せせる <input type="checkbox"/>試行錯誤の時間を設定する <input type="checkbox"/>思考の道具・材料を用意する <input type="checkbox"/>前回の失敗を振り返らせる</p>		<p>2・5 振り返りの具体例 <input type="checkbox"/>ふりかえりの時間を作る <input type="checkbox"/>学習して考えたこと <input type="checkbox"/>自分の考えが変化したこと <input type="checkbox"/>わかった要因を <input type="checkbox"/>わかった場面を <input type="checkbox"/>これからやつてみたいこと <input type="checkbox"/>自分の生活と学んだことの関連</p>	
対話的な学び	<p>3 見通しを持たせる <input type="checkbox"/>課題を先生が出す <input type="checkbox"/>子どもたちの疑問を教師が課題にする <input type="checkbox"/>子どもたちに課題をさせる <input type="checkbox"/>手順を示す <input type="checkbox"/>具体的な方法を先生が出す <input type="checkbox"/>具体的な方法を子どもから聞く <input type="checkbox"/>簡易的にやらせてしまう</p>	<p>6 ペアや班で考えさせる <input type="checkbox"/>まず自分の考えを書きさせる <input type="checkbox"/>時間を決める <input type="checkbox"/>道具（W・B付箋）を用意する <input type="checkbox"/>何について話し合うか明確にする <input type="checkbox"/>聞き手に感想を言わせる <input type="checkbox"/>紙や黒板に書いて俯瞰させる</p> <p>7 先生との対話から考えさせる <input type="checkbox"/>発問をいくつも用意しておく</p> <p>8 先哲の考え方から考えさせる</p>	<p>6 学級全体で考えさせる <input type="checkbox"/>発表の順番を決めておく <input type="checkbox"/>どの立場から指名するか決めておく <input type="checkbox"/>話し合いの焦点は何か決めておく <input type="checkbox"/>聞き手に質問や感想を聞く <input type="checkbox"/>ペア・グループの時間をとる <input type="checkbox"/>話し合いを板書する</p> <p>9 交流の表現方法 <input type="checkbox"/>表現する時間を作る <input type="checkbox"/>どんな方法で表現するか決めさせる。 <input type="checkbox"/>他の人の表現方法と比較させてよりよく表現させる <input type="checkbox"/>実物を操作して説明させる</p>	<p>10 全体交流（深める） <input type="checkbox"/>子どもの発言を取り上げる <input type="checkbox"/>子どもと間違えた回答を出す <input type="checkbox"/>全員が説明する場を作る <input type="checkbox"/>自分の言葉でまとめてさせる <input type="checkbox"/>図や表を使わせる <input type="checkbox"/>わざと黒板に先生が考えを書く <input type="checkbox"/>子どもに考えを書かせる <input type="checkbox"/>友だちの考えを見て、改めて考える時間を持つ <input type="checkbox"/>友だちの考えをノートに書かせる <input type="checkbox"/>他の問題を考えさせる</p>
深い学び				

本時の目標

B評価

	課題把握	課題追求	課題解決	振り返り
主体的な学び	1 学ぶことに興味・関心を持たせる 3 見通しを持たせる	4 粘り強く取り組ませる	2 自己のキャリア形成の方向性と関連付けさせる 5 自己の学習活動を振り返り、次につなげさせる	6 学級全体で考えさせる
対話的な学び		6 ペアや班で考えさせる 7 先生との対話から考えさせる 8 先哲の考え方から考えさせる 9 多様な表現方法を用いて話し合わせる		10 知識を相互に関連付けてより深く理解させる
深い学び		11 情報を精査して考えを形成させる 12 問題を見いだして解決策を考える		

国語用

本時の目標

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

B評価

振り返り		課題解決		課題追求		課題把握	
2	自己のキャラ形成の方向性と関連付けさせる	4	粘り強く取り組ませる	1	学ぶことに興味・関心を持たせる	主体的な学び	
5	自己の学習活動を振り返り、次につなげさせる	6	学級全体で考えさせる	3	見通しを持たせる	対話的な学び	
				6	ペアや班で考えさせる		
				7	先生との対話から考えさせる		
				8	先哲の考え方から考えさせる		
				9	多様な表現方法を用いて話し合わせる		
				10	知識を相互に関連付けてより深く理解させる	深い学び	
				11	情報を精査して考えを形成させる		
				12	問題を見いだしして解決策を考える		

授業改善チエックリスト～全体交流編～

全体交流の第一声は…
(初発問)

しゃべる(児童・教師)	書く(黒板・ノート)	要チェック
□計画的に指名をしている	□考え方や意見の関係が見えるように板書を書いている	□「いいですか」と聞いている
□違う立場の意見を述べさせている	□子どもの意見や考えのキーワードを黒板に書いている	□先生が考え方を説明している
□聞き手に、質問や感想を述べさせている (問い合わせている)	□図や表を使って黒板にまとめている	□子どもの発言を復唱している
□話し合いの視点を示す・焦点化させる発問をしている	□友だちの考えをノートに書かせている	□全員が説明する場、意見を出す場を作っている
□理解を深めてほしい内容に対する子どもの発言を取り上げている	□全員が説明する場、意見を出す場を作っている	□友だちの考え方を見て、改めて考えさせる(ノートに書いたり、ノートにまとめる)時間を持っている
□考え方の理由を説明させている		
□意見を言った児童に対してどうしてそう考えたのか問い合わせしている		
□わざと間違えた回答を出している		
		□自分の言葉で発言やまとめを言わせている
		□ペアやグループの活動を価値づけた言葉を言っている

I. 研究主題解決のための研究仮説や研究計画の立て方

① 校内研修とは

校内研修：学校で「研究」と「修養」をおこなうこと。

研究…子どもの指導法や指導内容について、工夫・改善していくこと。

修養…教師が、知識を高め、品性を磨き、自己の人格形成に努めること。

※校内研修は、地方公務員法、教育基本法、教育公務員特例法により、教員の権利と義務であることが示されている。

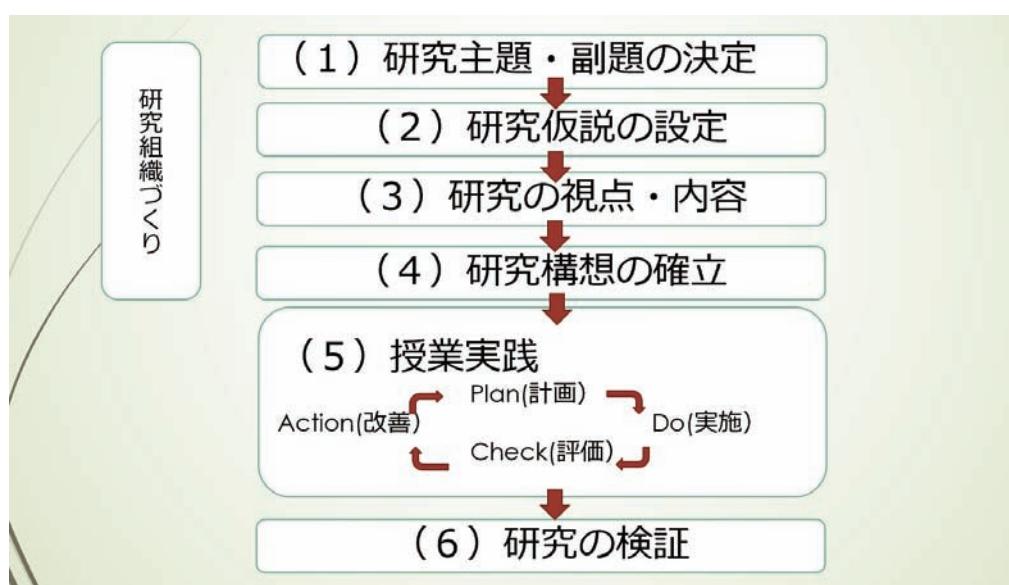
② 校内研修の意義

1. 学校の教育目標の具現化を図る。 2. 教育課程の改善を図る。

3. 教師の指導力向上を図る。 4. 子どもの望ましい発達を促す。

最大の意義！

③ 校内研究を進めるための手順

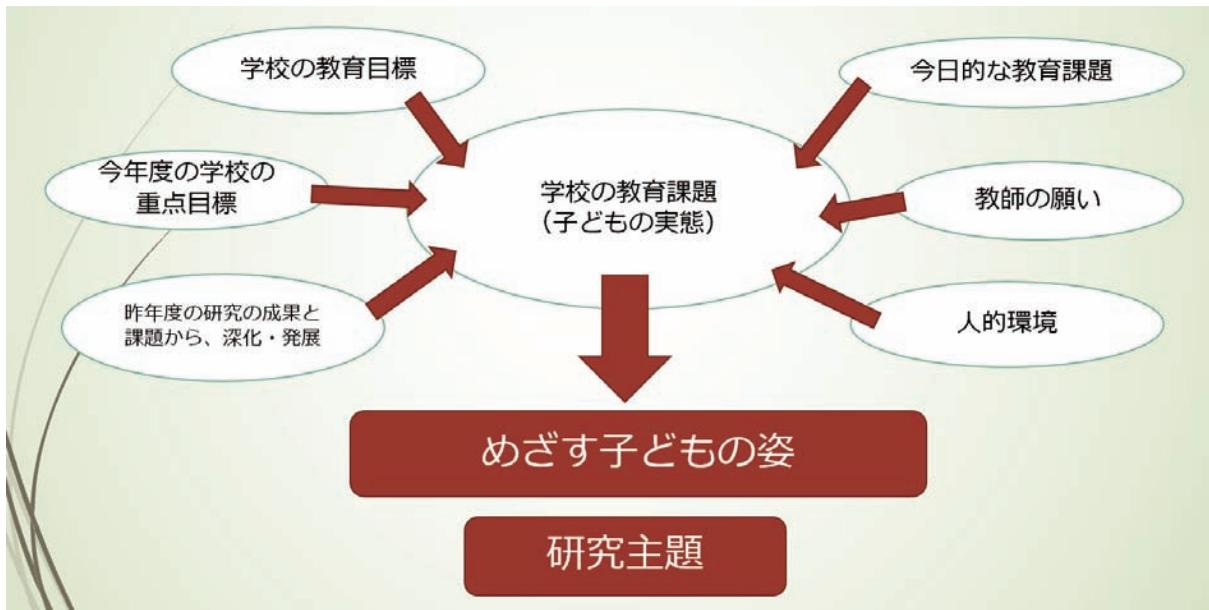


※研究主題・副題の決定や研究仮説の設定が特に大事な部分である。

ここをしっかりと固めることができると、おのずとやるべきことが見えてくる。

④ 研究主題・副題の設定

研究主題の設定にあたり、一番大切なのは自校の子供の実態を把握し、研究を通してどんな子どもに育てたいかを考えること。その上で、学校の教育目標や今日的な教育課題など、いくつかの要素を取り入れると良い。



研究主題・副題を設定する際の3つの要素

目的	…めざす子どもの姿。(どんな力をつけさせたいか。何ができるようになってほしいか。)
対象	…研究の領域・分野(どの教科で行うのか。どういう場面か。)
内容・方法	…研究の手立て(どのような方法でめざす子どもの姿に迫っていくか。)

研究主題・副題設定の例

例①

主題
自分の考えを豊かに表現する子の育成
①目的

副題
～②国語科における③言語活動の指導の工夫・改善を通して～
②対象 ③内容・方法

例②

主題
①豊かな心で人とかかわる力をはぐくむ
②道徳教育の充実
①目的 ②対象

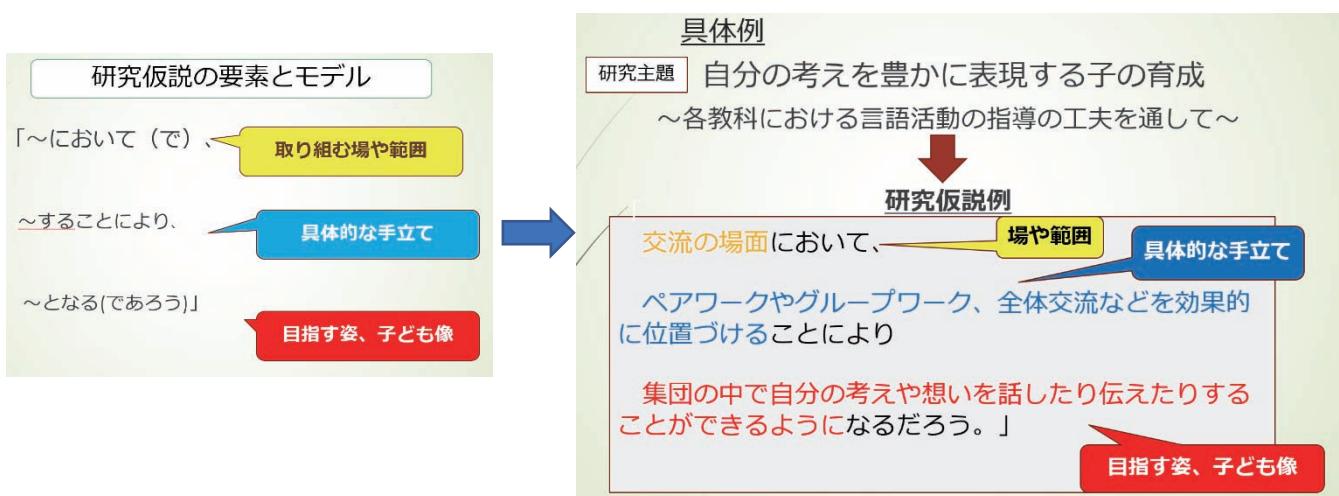
副題
～③心に響く体験活動との関連を図った道徳の授業の工夫を通して～
③内容・方法

※どのような目的をもって、どのような時に、どのようにして研究を進めていくのかが一目でわかるようにする。

⑤ 研究仮説の設定

ポイント

「めざす子どもの姿」=「研究主題」に迫るために
「取り組む場・範囲・手立て」を具体的かつ明確に示す。



※言葉をしっかりと定義することが大切。副題の「言語活動」には、書くことも含まれますので、話し合い活動によって主題に迫りたいのであれば、仮説では具体的に「ペアワークやグループワーク、全体交流」などとすると良い。そうすることで、共通認識に立って研究を進めることができる。

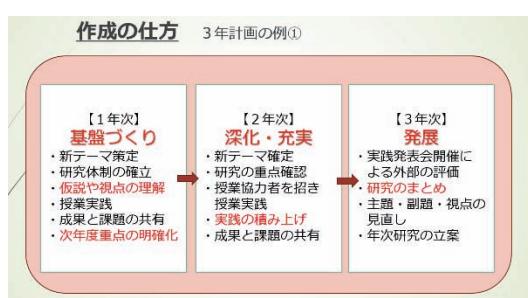
⑥ 研究推進計画の作成

○ 研究課題を解決する期間や研究課程の各段階の手順、作業内容などを明確にする。

留意点

- ・学校教育目標、教育の全体計画との関連を図る。
- ・研究推進計画と研究年間計画との関連を明らかにし、具体的な見通しを立てる。
- ・計画全体について全職員が共通理解できるよう整理する。
- ・必要に応じて計画の見直しができるような柔軟性を持たせる。

研究推進計画の例



3年計画の例②			
学年	1年次 研究計画の構想と立案	2年次 実践研究の蓄積と検証	3年次 実践研究の検証と発展
1学年	<ul style="list-style-type: none">◇研究課題の把握・保護者や教師へのアンケートによる把握・学力調査などによる子どもの実態把握	<ul style="list-style-type: none">◇推進計画の見直し	<ul style="list-style-type: none">◇推進計画の見直し
2学年	<ul style="list-style-type: none">◇研究主題の設定・実態把握のまとめと分析	<ul style="list-style-type: none">◇研究仮説の修正・1年次の課題を踏まえた修正・手立ての修正	<ul style="list-style-type: none">◇研究内容の修正・修正した仮説に基づいて研究内容の具体化
3学年	<ul style="list-style-type: none">◇研究仮説の設定・研究内容の構想・検証計画の樹立	<ul style="list-style-type: none">◇研究内容の修正・修正した仮説に基づいて研究内容の具体化	<ul style="list-style-type: none">◇検証のための実践・全学級での授業公開
	<ul style="list-style-type: none">◇検証のための実践・低・中・高、ブロック毎の授業研究・全校での授業研究	<ul style="list-style-type: none">◇検証のための実践・全学級での授業公開	<ul style="list-style-type: none">◇研究結果の整理・授業記録による成果と課題の把握
	<ul style="list-style-type: none">◇研究結果の整理・授業記録による成果と課題の把握	<ul style="list-style-type: none">◇研究結果の整理・授業記録による成果と課題の把握	<ul style="list-style-type: none">◇研究結果の処理・研究結果のまとめ
	<ul style="list-style-type: none">◇初年度のまとめ(成果の発表)	<ul style="list-style-type: none">◇2年次のまとめ	<ul style="list-style-type: none">◇研究全体のまとめ・研究のまとめと整理
			<ul style="list-style-type: none">◇次の研究の方向性の確認

※計画の年数は3年が目安。臨機応変に改善を図りながら主題に迫ることが大切。

2. まとめ方と次年度へのつなげ方

① 研究仮説の検証

事前・事後調査(アンケート、見取り、学力検査等)

+

仮説の有効性を検証



日常の授業や研究授業等でのデータ収集

工夫や手立てが効果的だったか

子どもの成長の役に立ったか

② まとめ方と次年度へのつなげ方

校内研究の結論は「成果」と「課題」

「成果」「課題」を把握する方法(例)

- 教師から見た子どもの様子や変容(アンケートや職員間の交流などで把握する)
- 研究討議による教師の指導方法で よかった点→成果 改善点→課題 とする
- 子どもに対する授業評価の結果で 数値が高い→成果 改善点→課題 とする など

※何をもって「成果」「課題」とするかについては、あらかじめ考えておくことが大切。

○「成果」を次年度につなげる

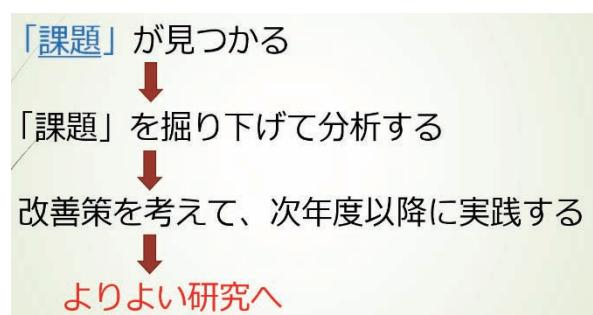
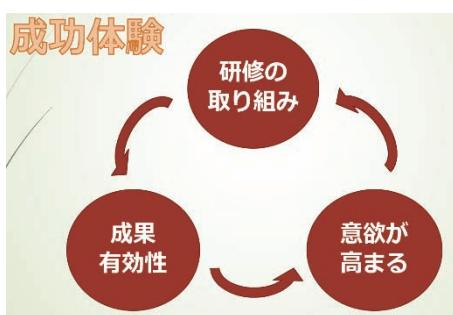


成功体験を重ね、意欲を高める。

○「課題」を次年度につなげる



課題を分析し、改善策を考え、
次年度に実践を行う。



※特に「課題」は、見つかるだけで相当な価値がありますので、決して悪いものではない。

3年次計画の1,2年次に「課題」が見つかれば、計画を修正してより主題に迫ることができるチャンス。

③ 資料の保存(研究紀要等)

資料を整理、保存する目的は、よりよい研究を続けるため。

紀要に残しておくべきもの(例)

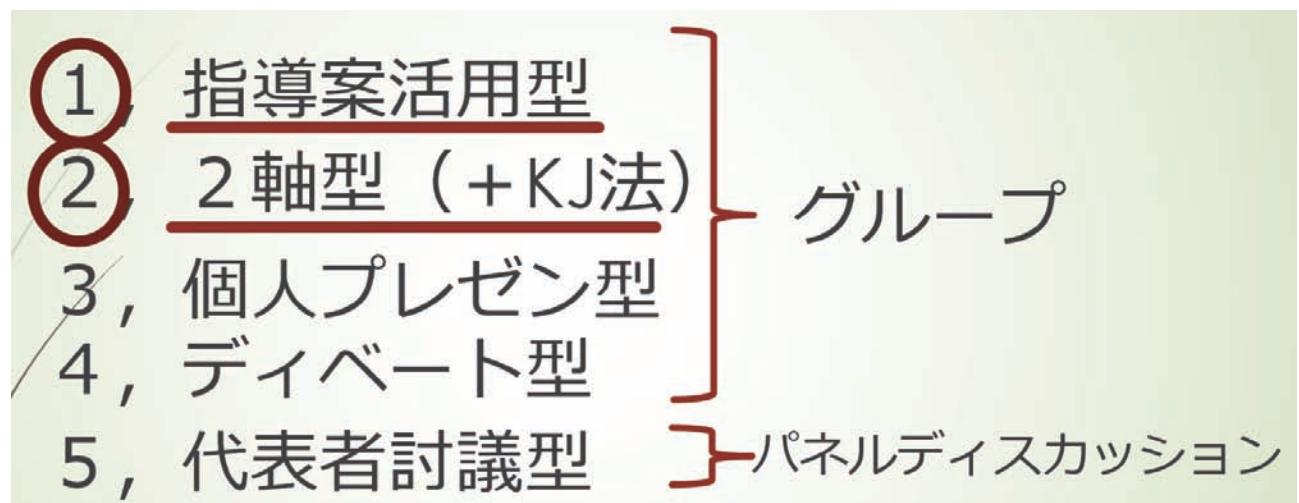
- ・研究の計画
- ・研究授業や研究発表会にかかる資料
(指導案・ワークシート・事後検討の記録・授業のビデオ・写真など)
- ・アンケート等の質問項目と集計結果

電子データ化で、時間・場所・コスト・負担を削減!!

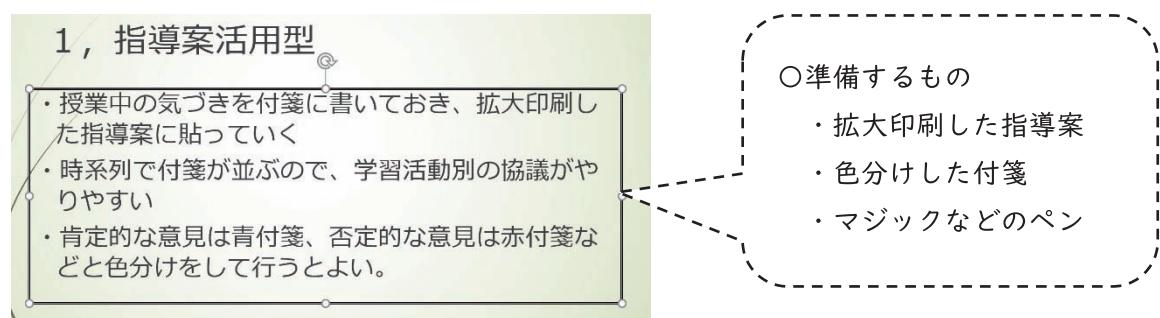
3. 研究討議とファシリテーター

① 研究討議の方法

5つの討議の型



※「1. 指導案活用型」「2. 2軸型 (+KJ 法)」は、よく行われている討議の型である。



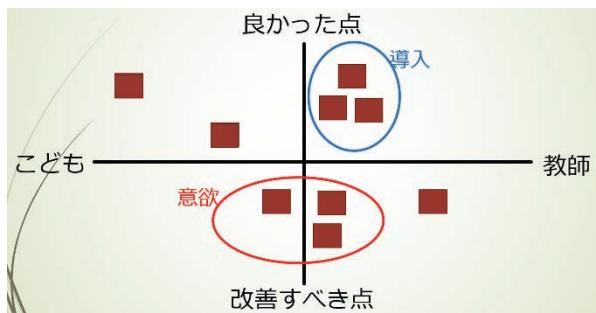
2, 2軸型 (+KJ法)

- ・授業を見て、1つの付箋に1つの事柄（意見・考え方）を書いておく。
- ・大きめの紙に関数のグラフのようにx軸、y軸を書き、区切られた4か所に付箋をおいて協議する。
- ・それぞれの軸は「生徒・教師」「良かった点・改善すべき点」など決めておく。
- ・付箋に書かれたものをカテゴリにまとめる

○準備するもの

- ・縦軸、横軸の書かれた模造紙
- ・付箋
- ・マジックなどのペン

↓イメージ図



3, 個人プレゼン型

- ・授業中の疑問や意見などをカードに記入しておく。
- ・カードを大きめの画用紙にカテゴリ別に貼っていき、授業に対する自分の考えを一人一人がプレゼンしていく。
- ・全員が簡潔に意見を述べる必要があるため、授業を見る目も養われやすい。

4, ディベート型

- ・6人程度のグループで構成し、授業者の意図をくみ取り、擁護する3人と、逆に徹底して批判する3人に分かれる。
- ・具体的な子どもの姿や自分の実践を基に意見を言うのが大切である。
- ・また、批判側は否定するだけでなく、代案を示す必要がある。

5, 代表者討議型

- ・学年部等の代表3～4名で構成し、授業について意見を述べ合う。
- ・特に批判的な意見は大切にして、代案を示すようにする。
- ・その他の職員は、パネルディスカッションで出された意見や考えについて、自らの意見を述べる。

3～5は比較的難しみであるが、それぞれの意見を構築したり、批判的に見て改善策を考えたりしていく力を養うことができる。

② ファシリテーターとは

ファシリテーター：目的に向かって良い会議へと導く進行役。

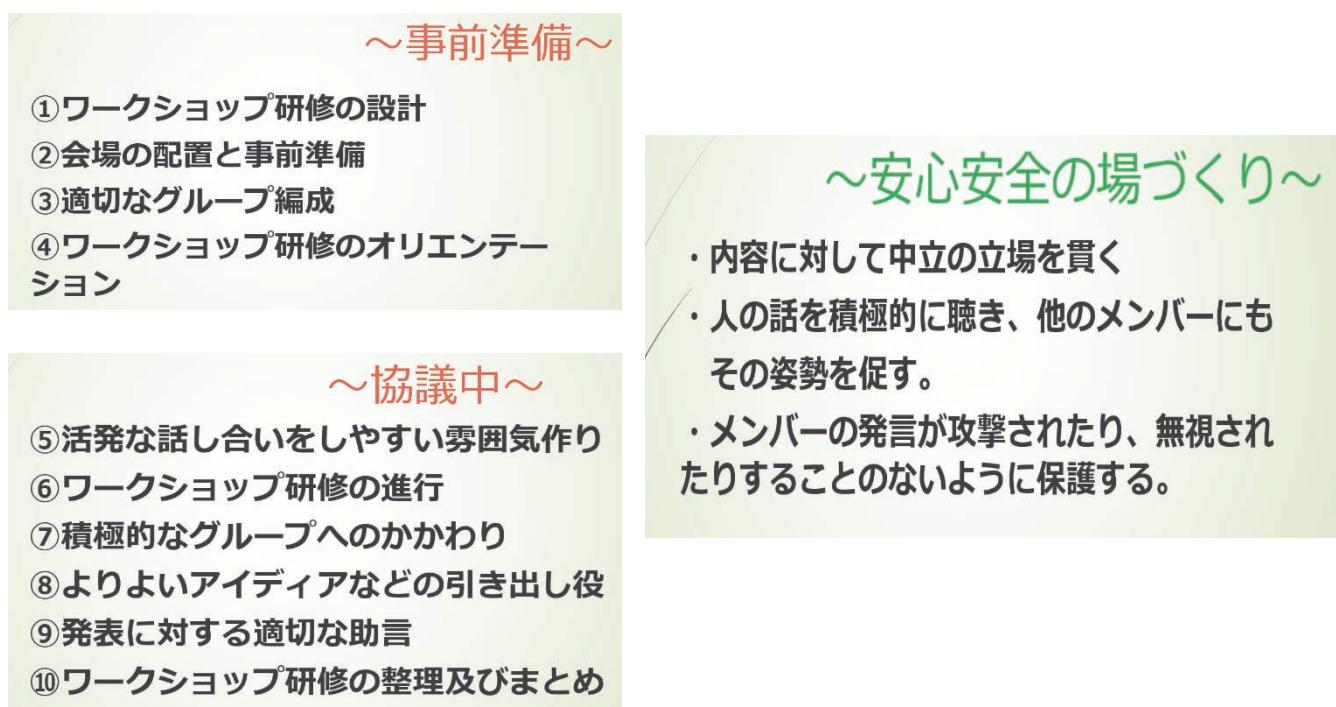
グループ討議の課題

- ・意見は出るもの言いっぱなし
- ・グループの構成メンバーによる偏り



ファシリテーターが機能すれば
これらの課題はなくなる！

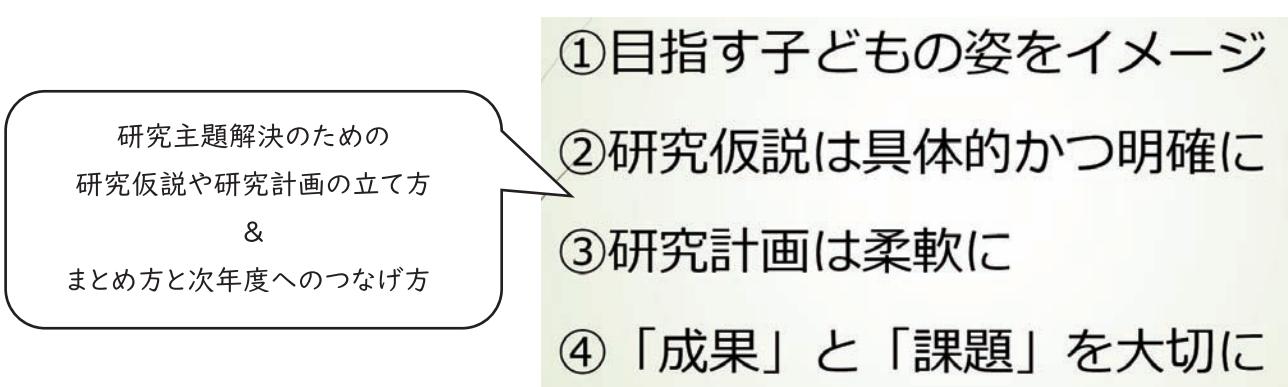
③ ファシリテーターの役割



※ファシリテーター技術は、経験することで高められる。とにかく実践あるのみ。

1年間は同じ人にファシリテーターをお願いして、その人を中心にグループメンバーを構成したり、討議のやり方などについて簡単にでも事前に打ち合わせしたりしておくと良い。

4. まとめ

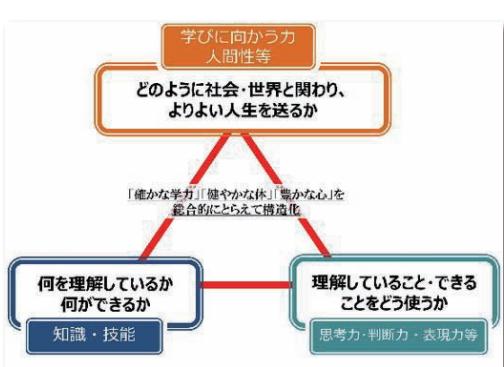


1. 客観的な立場に立つ
2. 参加者を主役にする
3. 場の状態を把握する
4. 場の状態に合わせて介入する

ファシリテーターの心得

講義2 「学びに向かう力」研修パッケージの提案

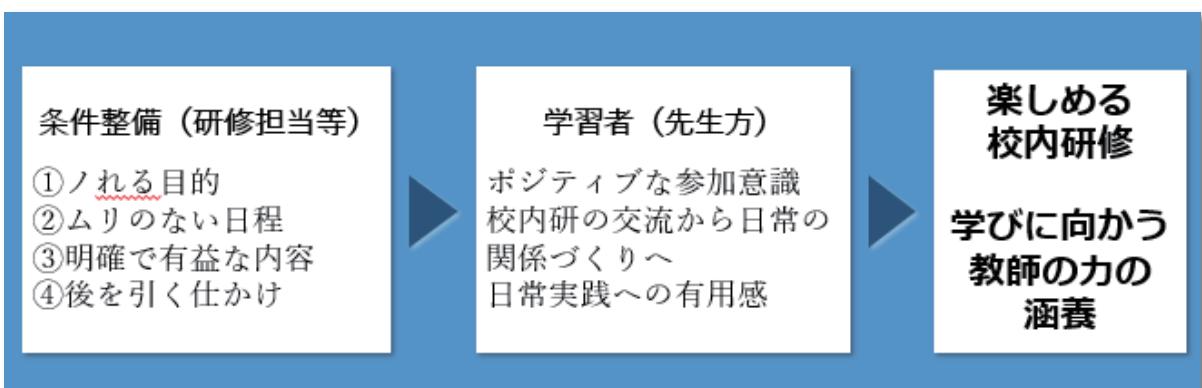
1. 「学びに向かう力」と校内研修



児童生徒に「学びに向かう力、人間性等」を涵養するためには、教師の指導・指示で動くことだけではなく、むしろ自主性や好奇心・探求心を伸ばしたり、友達と協力したりすることが必要です。「やらされる」勉強ではなく、「自ら取り組む」学習へと転換する必要があります。また、その学習活動には、様々な「楽しさ」が内包されていなければなりません。児童生徒が学ぶことに対する楽しさを見いだせれば、「学びに向かう力、人間性等」を高める第一歩が踏み出せます。

では、話を教員同士の「校内研修」に置き換えてみましょう。

私たちは、自分の指導技量を高めるため、その効果を同僚と共有するため、学校全体で連携して教育活動に当たるため等、様々な点から校内研修を実施しています。普段行っている校内研修は自ら取り組む学習の場や機会となっているでしょうか。研修担当の先生を「授業者」とすると、自校の先生方は「学習者」に当たります。学習者たる先生方をどのように主体的に取り組んでもらい、少しでも楽しみながら実践力や実践意欲を高めてもらうかが鍵となります。



課題や主題が明確で、各世代の先生方が前向きに参加できるように声をかけ、日程や時間設定に無理がなく、事前の準備や負担が軽く、実践的な研修内容であれば、学習者たる先生方はポジティブな参加意識を抱いてくれます。このような好循環を生むことが、校内研修を行う上での環境づくりとして必要となると考えます。

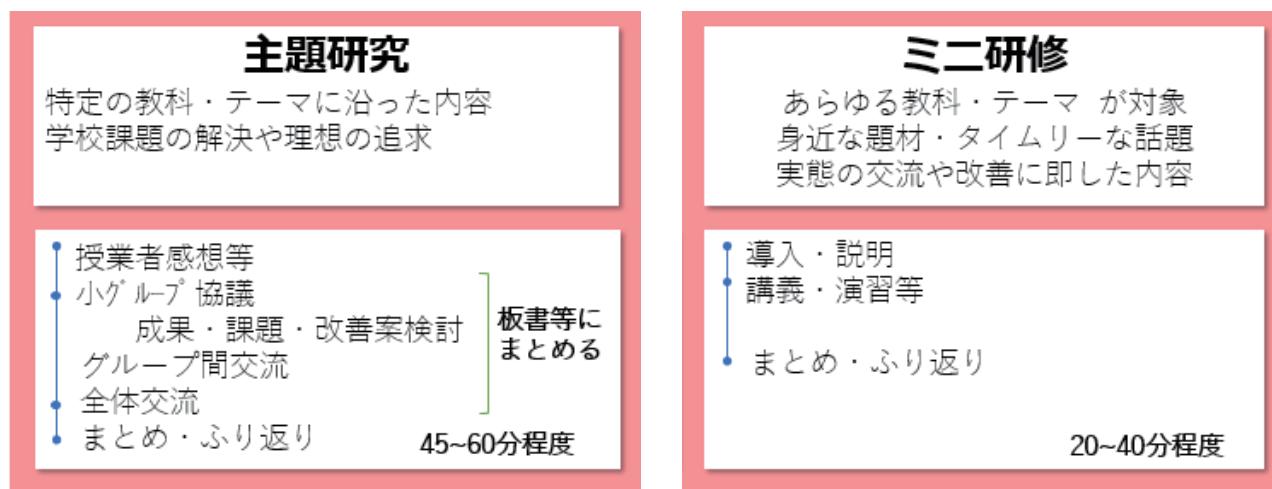
2. 「校内研修のパッケージ化」の具体

(1) 研修の内容とゴールを明確にする

従前より脈々と受け継がれている校内研究の形「主題研究」と、あらゆる教科やテーマを対象とした自由な内容で行われる研修「ミニ研修」の二つに分けると、その内容や目指すゴールが差別化しやすくなります。

主題研究では、各校で設定される仮設やテーマに合わせて検証・改善を行っていきますが、その過程では、できるだけ時間設定をコンパクトにしたり、協議の持ち方をより効率化したりすることによって、短時間で高い効果や成果を期待できる形に変えていく必要があります。

一方、幅広く自由な内容で行われるミニ研修は、主題研究だけではすくい上げきれない悩みや今日的な課題にも対応することができるため、取り入れる学校が増えてきています。ミニ研修では、できるだけ短時間で終えられる内容にし、楽しみながら学んだり交流したりすることで、参加する先生方の主体性が高まり、学習効果を期待できるものになります。



(2) ミニ研修パッケージの紹介

ミニ研修の内容として下図のような例が挙げられます。実施に当たっては、自校の先生方にアンケートを取ったり、研修担当の先生が必要と思うものに取り組んだりして、先生方が「学べてよかった」「次はあれをやりたい」と思えるような内容にできるとよいでしょう。



第2章 III 研修講座「校内研修」配付資料から

ミニ研④ 歌声へんしん大作戦！



8月29日(木)の研修では、来るる学芸会に向けての学芸会を行いました。横澤先生を講師にお願いし、これまでの数多くの指導経験をもとにした音楽指導、とりわけ合唱の指導についてご教授いただきました。横澤先生のお話は、楽しさを感じさせる授業の導入での工夫、地声と頭声の出し方のヒント、合唱指導から育てたい心や意図など、授業で使える工夫がいっぱいの時間となりました。

気持ちをそろえて 音色をそろえる

仁木小の子ども達は「ワラ声」が強いのです。教師の声かけがあるだけで子どもの意識が変わり、よい声になっていくのです。簡単なことですですが、どのような意識で指導にあたるかが大切ということを改めて感じました。

ミニ研②家庭学習 TABLE STYLEで

7月4日(火)に行なったミニ研のテーマは、「家庭学習」でした。

それぞれの学年が、発達段階や学習の様子に合わせて、どの学生でも行っていることは知っていたものの、その具体的な形はお互いあまり知らないかったことの一つが、この家庭学習ではないでしょうか。そんな今更取り立て聞くほどでもないけど、知っていたら有益だ、という内容にスポットを当てるのも、ミニ研のよさではないでしょうか。

このミニ研で、仁木小のオリジナル研修形態が形作られることになりました。それは、6年教諭だからこそできた偶然の産物、『TABLE STYLE(テーブルスタイル)』です。たまたま6年生が使っていた卓球台の家庭学習ノートを広げて、そのまま研修を始めてみたら、なんだか話しやすくて見やすくて、いい感じになっていたのです。

ミニ研⑤理論からつなぐ仁木小の実践

10月30日(火)のミニ研修は、これまでの校内研修で積み重ねてきた成果や課題を1ヶ月の研究授業や日々の実践につなぐことができればいいなと考え、理論研修を取り入れてみました。

「素人が百しゃべるよりも、本物を見た方がよい」ということで、今回は、独立行政法人教職員支援機構のサイトにアップされている校内研修用動画を見させていただきました。

『新しい学習指導要領において期待される学び』では、「課題設定」「見通し」「学び合い」「あり返り」といった場面での授業改善のポイントが解説されていました。

理論的な裏付けを得ることも大事ですが、自分達の実際の授業でどのようにそれを表していくかが大切になってきます。今後の算数科の授業づくりにおいては、課題解決型(A型)、習得型(B型)、習熟型(C型)のそれぞれに合わせた「課題設定」や課題を解決するための「交流」「学び合い」などに位置づ

講義型・教授型のミニ研修では、身近な方や自校の先生に少しだけ手間と時間をかけてもらい、講師役になってもらうのがおすすめです。講師となった方の隠れた知識や経験を伝えてもらうことで、自校で手軽に見識を広げたり技術を得たりすることができます。また、講師の先生のことをより深く知ることになりますので、職場内での会話や相談などにつながり、同僚性が高まるることも期待されます。

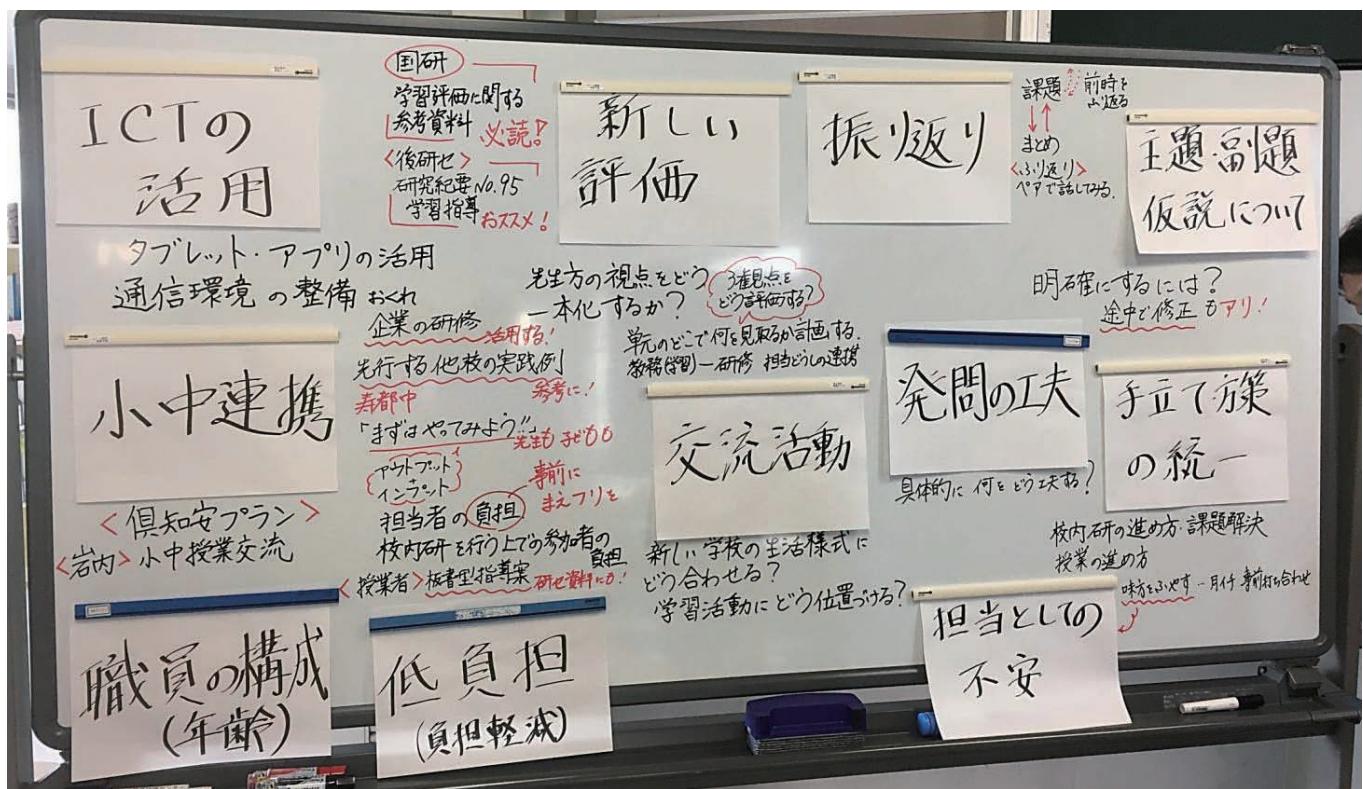
話し合い型・全員参加型のミニ研修では、日ごろから指導のしかた等で悩んでいる事柄や全校で指導の在り方をそろえたい内容など、自校の課題や取り上げたいテーマに応じて、先生方どうしが話し合ったり交流したりすることを目的とします。そこで生まれた気づきやヒントを授業実践等に生かしてもらうことをねらっています。左図では、各学年学級の家庭学習(宿題や自主学習)の取組状況を交流するため、児童が実際に使用しているノートやプリントを持ち寄り、どのようなねらいでどのように取り組ませているかを交流しました。この交流を契機に、小学校6年間での系統立てた家庭学習への取り組ませ方について理解を深め、学校全体の取組へと発展させることができました。

また、全員が参加しやすく、学習効果を上げやすい取り組み例として研修動画の活用もおすすめします。独立行政法人 教職員支援機構(NITS)が配信しているオンライン講座は「校内研修シリーズ」など様々なジャンルがそろっており、自校の課題やテーマに沿った研修教材が見つかるはずです。ミニ研修としてねらいを焦点化して取り組む際の一つのアイデアとして有効です。

(担当:仁木町立仁木小学校 田口晴也)

研修講座「校内研修」講義III・演習 より

～ 校内研修にかかる課題・悩みについての交流～



最後の講義III・演習では、校内研修にかかわる課題や悩みについての交流を行った。参加者の先生方から、校内研修にかかわる自校の課題や悩みなどを出していただき、全体で交流した。

参加者の先生方が、積極的に発言してくださったこともあり、多くの話題が挙がりました。出されたものをまとめたものが、ホワイトボードの写真である。

各学校の先生方から出されたテーマを大きく2つに分けると、校内研修に直接かかわるものは5点、研修以外の授業全般にもかかわるものが5点ほど挙げられた。センター所員から情報提供することを考えておりましたが、参加者の先生から出された悩みなどに、ほかの参加者の先生方が、自校での取り組みなどを紹介してくれたことで、課題の解決や、改善の糸口をつかむヒントがたくさん出された。

具体的には、

校内研修に直接関わるものとして、

- 主題・副題・仮説について
 - 研修推進の手立て
 - 担当者としての不安
 - 負担の軽減
 - 職員の年齢構成

授業等全般にも関わるものとして

- ICT(特にタブレット)の活用
 - 小中連携
 - 新しい評価(特に中学校)
 - 授業での「振り返り」
 - (コロナ禍における)交流活動

などが挙げられ、課題や悩みに対し、「私の学校ではこのように取り組んでいる」、「〇〇の紀要に詳しく説明が書かれています」というような情報交換が行われ、今後の研修の推進にむけたきっかけをつかめたと感じている。

校内研修にかかる交流演習の事例紹介

【演習】校内研修推進にかかる交流

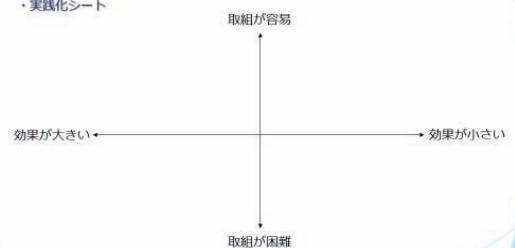
○交流の方法（実践化シート）

- ① 研修推進にかかる取組の課題点、悩みを付箋に記入する（個人5分）
- ② 個人で出した付箋に対し、グループで改善策や解決策を話し合い、別の色の付箋に記入していく。（グループ10分）
- ③ 実践化シートに付箋を貼りつけていく。（グループ15分）
【縦軸】上：取組が容易 下：取組が困難
【横軸】左：効果が大きい 右：効果が小さい
- ④ 付箋に書いたものをマジックで題名をつけ、実現可能な順位をつけていく。（グループ10分）
- ⑤ 発表者を決め、全体で交流を行う。（全体10分）



交流の方法...

・実践化シート



- ① 研修推進にかかる取組の課題点、悩みを付箋に記入する（個人5分）

思いつくものをどんどん書き出しましょう。
1枚につき一つの内容を記入します。
できるだけたくさん書きましょう。

課題点・悩み



- ② 個人で出した付箋に対し、グループで改善策や解決策を話し合い、別の色の付箋に記入していく。（グループ10分）

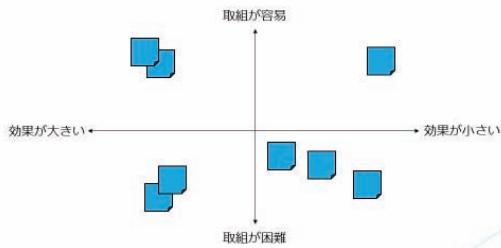
グループで話し合って記入しましょう。

策が複数ある場合は、別の付箋に書きましょう。

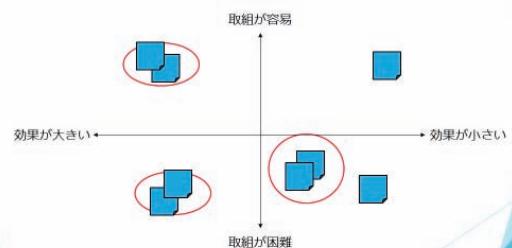
解決策・改善策



- ③ 実践化シートに付箋を貼りつけていく。（グループ15分）



- ④ 付箋に書いたものをマジックで題名をつけ、実現可能な順位をつけていく。（グループ10分）



⑤ 全体交流（全体で10分）

ファシリテーターの心得

1. 客観的な立場に立つ
2. 参加者を主役にする
3. 場の状態を把握する
4. 場の状態に合わせて介入する

ワークショップ型校内研修の課題

- ①活発に意見は出るが、言いっぱなしになって終わる。
- ②マンネリ化の傾向が見られる。
- ③準備に時間を要する。
- ④小グループの構成メンバーによる偏り
- ⑤ファシリテーターの技術の向上

ワークショップ型校内研修の課題

- ①活発に意見は出るが、言いっぱなしになって終わる。

解決策

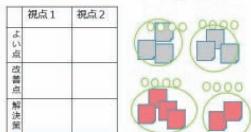
課題を出して終わりにせず、解決策を話し合う時間を十分に確保する。

ワークショップ型校内研修の課題

- ①活発に意見は出るが、言いっぱなしになって終わる。

解決策 発散技法と収束技法を組み合わせる。

マトリクス法 + KJ法



ワークショップ型校内研修の課題

- ①活発に意見は出るが、言いっぱなしになって終わる。

解決策

全体のファシリテーターとグループのファシリテーターで事前に打ち合わせを行い収束への見通しをもつ。

どのように収束していくかのシミュレーション。

予想される意見

話し合いの視点の確認

時間配分

ワークショップ型校内研修の課題

②マンネリ化の傾向が見られる。

解決策

よい意味でとらえると、職員が手法について理解し内滑に行えているとも言えます。

- ・ワークショップ型の欠点を補う様々な手法を取り入れてみたり、目的に合った方法を選択したりする。
- 例) 概念化シート、マトリクス法、KJ法、
短冊法、拡大指導案など

ワークショップ型校内研修の課題

③準備に時間要する。

解決策 研修グッズをまとめておく。



ワークショップ型校内研修の課題

④小グループの構成メンバーによる偏り

解決策

- ・ねらいをもったグループ編成をする。

経験年数の
バランスのよい
配置

学年団・同教科
でまとめる?
分ける?

グループの
ファシリテーターは
誰にお願いする?

ワークショップ型校内研修の課題

⑤ファシリテーター技術の向上

ファシリテーターの役割を理解し、経験を積む
(実際にやってみる)

具体的にできること

ファシリテーター同士で
協議の事前打ち合わせを行なう。

1年間同じ人に、グループ
のファシリテーターをお願い
する。

【第3章】

研究の
成果と課題

今年度の研究の成果と次年度に向けた課題

I. 「《視点1》学びに向かう力を育成するための授業改善」の成果

●主体的・対話的で深い学びを目指した授業【研修講座「学習指導」(授業改善)】について

- 「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善のための13の視点を提示とともに、それを取り入れた「板書型指導案」を紹介した。あわせて、授業改善や授業デザインの参考となるよう、具体的な教師の手立てとして「学びの具体例」も提案した。
- また、自分の授業を見直すための「チェックリスト」を作成し、提案した。参加者には、実際にこれを使って授業のビデオを視聴してもらった。「改善点が明確になった」「明日以降の授業から見直そうと思った」などの声があり、授業改善に有効なものだったと考える。

●若手教員のための、1時間の授業づくり【研修講座「学習指導」(授業づくり)】について

- 多くの学校で揃えられている1単位時間の課題解決型の授業づくりについて、具体例をもとに説明して理解を深めたのち、実際に指導案づくりを行ったことで、授業づくりのイメージをより明確にることができた受講者が多かった。
- 学級の実態にあった授業づくりについて、学習規律の側面から理論と方法を講義し、受講者の理解を深めることができた。
- 指導と評価(子供の見取り方)について、理論と方法の両方を講義できたことが、受講者にとって理解を深めることに繋がった。

●センター所員の所属校での検証授業の実施について

- 今年度は、新型コロナウイルス感染症対策の関係で実施しなかった。

2. 「《視点2》実践的指導力の向上を図るための教職員研修の工夫・改善」の成果

●研修講座「校内研修」では…

- 当センター初の試みであるオンラインでの実施となった。例年の講座の中心である、校内研修を進めるための手順、研究主題・仮説の設定、研究推進計画の作成について提案した。さらに、ファシリテーターの心得や、研究討議の進め方について学校の中でも実践可能なワークショップとして演習事例を挙げた。そして、短時間で効果的な研修を進めるための方策の一つとして、NITS(独立行政法人教職員支援機構)の活用を進めたり、定期的にミニ研修を行っている学校の実践事例を紹介したりした。演習では、校内研修にかかる課題や悩みなど出していただき、参加者の先生同士でその課題に対する自身の取組などを交流することで、解決や改善の糸口をつかむことができた。

3 次年度に向けての課題

- 研修講座受講者のアンケートから、他校の教職員との情報共有のニーズが高いことを把握できる。研修講座の終盤で協議の場面を設け、研修講座で得られた知識や理論をもとに、これまでの受講者の実践を振り返り、改善につなげられるようにするとよいと考える。

- 後志教育研修センターを中心として、他校の教職員との情報共有という視点でも、「しりべし指導案バンク」の立ち上げを次年度中を目指して進める必要がある。現在、OneDriveを使って、パスワード設定で利用できる形で作成している。

あとがき

昨年に続き、世界中が新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされ、学校現場では、クラスターによる学級閉鎖や休校の措置も取られたところもありました。そして、休校中の児童生徒の「学びを止めない」の思いのもと、オンラインでの学習を進めた学校も多くありました。しかし、ICTを活用した授業の組み立てについて研修機会が十分に確保できていないことも悩みの一つではないでしょうか。

そのような中、新しい研究主題の2年次としての活動となりました。当センターでは教育研究所としての役割の大切さは再度認識しつつ、昨年度からクラウドを利用した指導案バンクの作成に向けて準備を進めてきました。今年度は試行に向けての具体的な形の作成に向けて活動をしましたが、十分な研究を進めることはできませんでした。

所員担当の研修講座についても、6月の「校内研修」講座については、Zoomを使ったオンラインでの講座となり、「学習指導（授業改善）」については、開催日の変更をして行いました。予定の期日が変更になったことにより、参加できなくなった先生もおり、大変申し訳なく思っております。

今回のNo.96は、本来であれば第3章に検証授業についての考察を入れることになりますが、今年度は新しい研究主題についての概要と3本の研修講座で作成した資料をもとに編集したものです。QRコード（授業改善ー11, 12）など、新しい試みもしておりますので、是非活用していただきたいと思います。

末筆になりましたが、本研究紀要作成にあたり、お力添えをいただきました研究委員の先生方をはじめ、教育関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。

令和4年3月

研究委員

学習指導に関する調査研究委員会

研究委員長	亀井 孝志	(島牧村立島牧中学校)	教諭)
副委員長	鶴見 卓哉	(岩内町立岩内西小学校)	教諭)
委 員	笠原 雄哉	(岩内町立岩内第二中学校)	主幹教諭)
	小西 淳樹	(余市町立黒川小学校)	主幹教諭)
	馬場 真理子	(俱知安町立俱知安小学校)	教諭)
	富樫 広介	(黒松内町立黒松内中学校)	教諭)
	田口 晴也	(仁木町立仁木小学校)	教諭)
	森 拓実	(俱知安町立西小学校)	教諭)
	武田 麻衣子	(岩内町立岩内東小学校)	教諭)
	高田 韶	(仁木町立銀山中学校)	教諭)

研究協力員

担当指導主事 新栄 裕 (北海道教育庁後志教育局義務教育指導班 指導主事)

研究紀要発行委員会

研修部長	原田 益明	(俱知安町立俱知安小学校)	教諭)
研修講座主事	太田 亘	(俱知安町立俱知安中学校)	教諭)
調査研究主事	清水 栄治	(京極町立京極小学校)	教諭)